



ル 4
4692
4



吉澤文庫



播磨名所巡覽圖會卷之三目錄

山	養寺	慈眼寺	新在古塔	下居清水	常樂寺	妙見大明神	加古驛	觀音寺	假寢岡	福里村代神樂	砂子大明神
山	養寺	慈眼寺	新在古塔	下居清水	常樂寺	妙見大明神	加古驛	觀音寺	假寢岡	福里村代神樂	砂子大明神
高祥寺	高畑村	教信寺	泉式部塔	七騎塚	常任寺	天満宮	瑞應寺	福勝寺	蓮花寺	別府	別府
高畑村	教信寺	泉式部塔	七騎塚	常任寺	天満宮	瑞應寺	福勝寺	蓮花寺	別府	別府	別府
高畑村	教信寺	泉式部塔	七騎塚	常任寺	天満宮	瑞應寺	福勝寺	蓮花寺	別府	別府	別府

門 九 4
號 41 00
卷 4

早稲田大学 図書館
36. 6. 21 蔵

藏書之印

神松

比壽灘

尾上天満宮

養回社

高砂

荒舟

十輪寺

池大明神

常光寺

稱名寺

宝苑寺

印南浦

尾上松

崎宮

多砂泊

荒舟神社

高砂神社

高周寺

常親寺

龍泉寺

牛次天王

今津川

高深

高砂神社

多砂系

八幡宮

赤松政村墓

加古川城跡

天満宮

石船

大川

高砂神社

多砂系

印南郡

石舟古池

加古川

泊大明神

弁財天社

末田村

石屋

津島神社

妙見大明神

生石明神

乃濃舟戸

大日寺

安養寺

飛神塚

渚の舟

圓通寺

本村城跡

八十石陞

腰柳岩

真名舟

津久村

龍山石

籠基

梨原寺

高座石

曾根天満宮

黒岩

金剛寺

八十河原

鞍馬寺跡

石舟清水

生石明神

石船

白矢系跡

六騎武者塚

倭保崎

細堂

曾根松

松笠山

極田寺

佐伯寺古池

毘沙門岩

乃濃法隆寺跡

石宝殿

阿彌陀寺村

時光寺

佛心寺

加養明神社

梅乃舟

蓮教寺

松笠浦

橋本名所巡覽圖會卷之三

加吉那

土山

海石七加古郡

慈眼寺

海石の西

通照山高洋寺

日村

高畑村

新在

在家古塔

傳は松樹とて又かうてみふりありけり人の古懐より一御人云後法皇

雲生山安養寺

一色村

横尾山横尾寺

新在

本寺觀世音

同基法道仙人之二十八載小松天皇の御所寛平法皇潜居けり如益控
管數十の坊舎ありし且兵火よりうりて今一坊觀音地蔵の二像華田の園
伽丹あり觀音の靈記の實に器以一名横尾の觀音と云

念佛山教信寺法泉院

教信上人の元亨釋書及び性十箇の
おは九倍の寺に傳書一帖とて今く法津堅固のる清和帝

の御宇より封境廣大にして僧院八十餘坊あり寺八百石佛供料

三子貫と揚入其後兵火より罹り田録及びふと崇徳院の御宇より百石

を揚入國中より人民此道場を集り念佛修好意よりはし又後深
葉院の御宇三百石と揚りけり時津云宗西山流義と如きり毎年八月

大塩 天祚河 寺三ヶ寺

的形 祇園三基 寺三ヶ寺

楠岩

的形天邊宮

海岳寺

大常禪

八雲地蔵

祇園三基

都深井

安樂寺

報恩寺

因福寺

赤松法墓

八幡宮

觀音寺

天祚山古塔

大澤清水

長樂寺

助承池中待

高津庵山

大谷村

鷹巣山

唐ヶ塚村

志吹洞

法華山一乗寺

本寺の者 赤天 妙尼 毘沙門 法王 三層塔 待樓

論苑 興隆 法道仙人廟 刺止標石

赤松法墓

念佛山

教信寺

雨基教信上人奉
阿彌陀如来用山
寺の教信上人の所看
と安曇川 蓋殿あり
は青の 寺深き曰く
教信上人の人身
元十九代先仁帝
り皇子御奉十
御前都真福寺
と抄ひて出され
夫より 諸法を傳
達し 遷り 揚を
加右郎印南の地口
と傳り念佛三昧と



新編

入る真教八事

八月十五日
遷化



と後記に記されしは、和泉守末孫と見え、
を以て又後眞入於眞のころを以て性室上人のりく、
を工人いまして書字の移らざるをたうべし、
又考ふる小和泉守とて知られり、
失給ひて保昌が妻より保昌平とあり、
濃心院小御者よりありて専ら法元といひ奉を傳へて三月廿一日と世と見え、
本條保系於末福寺、
先達て死せしや、
具平親王墓、
下居清水、
正二位日圓大明神社、

明和元年大村相倉と次去勝阿原村西回道新溝之口村大村を新力と合て
再造し今の社となり、毎年九月初年の日祭あり、御中隔年と勤む又二月
八月初年の日既なり、御の飲酒と傳へ又正月初年の日大既となりあり、是ハ小泉
御刀祿と稱して舊家三十六人の因より勤む、是ハ各六條とて明津の供養職
といふ又正月美の日より己の月まで七日のちまひ籠りの祀とて、唱物考曲を

傳止て下女下男の古郷へ久し大ハ他郷より來り給ひ、水園山より放ら家の戸
邊よりは溝より油と飯茶柄板の類は、是後葛と纏ひ言渡り、再々給て奉と
かた月代は浴衣と奉り、是よりて嚴重なり、一圖の例とて、
別當非も田中乃松石の神盤より一の居へ出はらる、是と俗に御子故りと
つかくて、撞撞と期して忌と脱以、是年午の日と平明とて、村あり刀祿とて、
猶幼はけ外、是節の式と悉く刀祿の叙と忌務の回、
中池田の邊へ出く被撰り、
の一族といふ、
本は七日の忌務の非の生、
を子岩、
二塚祠、
紫津稻飯命よりて水園五瀬命の牙之

室生山常樂寺、
七騎塚、
大建村の山常樂寺、
水園山より放ら家の戸邊よりは溝より油と飯茶柄板の類は、
是後葛と纏ひ言渡り、再々給て奉と
かた月代は浴衣と奉り、是よりて嚴重なり、
一圖の例とて、
別當非も田中乃松石の神盤より一の居へ出はらる、
是と俗に御子故りと
つかくて、撞撞と期して忌と脱以、
是年午の日と平明とて、
村あり刀祿とて、
猶幼はけ外、
是節の式と悉く刀祿の叙と忌務の回、
中池田の邊へ出く被撰り、
の一族といふ、
本は七日の忌務の非の生、
を子岩、
二塚祠、
紫津稻飯命よりて水園五瀬命の牙之

中津村城址

鎌倉後五郎系政の末系松原十右衛門入道や香居殿あり
天心中津村に在り

妙見大明神

天満宮 粟津村
天満宮 粟津村

薬王山常任寺

寺西 五社大明神 寺東村

加古郡 希加古乃松

人馬大久保の誤り 小川の流とと郡界と 寺家町と

加古郡又屬一加古川村の印南郡又屬以二郡家つきの乃譯之

松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして 未大他言

附記 左平記又勅回義貞の病氣よくありけれんが又万余騎の勢と率して

西國へ下り後陣の勢を待備へんみ小攝方國加古川又日通箇々なる

其勢都合六万余騎とありて赤松と松原の兵を以て押寄たり

加古島

は海に今ありは乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

みわと進く相違ありては乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

石あり東の水邊村は網のたつたあり石あり今も石あり中津村 川原町 家川系町

三はより處女塚淡路橋は乃浦と次乃とありて其次に

つるこのゆきとびとてより其次に乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

とよとていふ乃浦の二尺のたつたを乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

尾とよとていふ乃浦の二尺のたつたを乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

所名

加古波

乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

所名

加古湊

乃松原のそとと見えは攝津の格のわたりむまやの考よりして

我心靡子乃後りの網子掩ふ心やむとれとる
 うらとてかこれ後りよひく網乃ゆ糸の君よ何せとる人
 加古驛
 加古郡古所郡界と驛寺家加古川と家つみこ
 加古驛上と加古驛と物ハ寺家可つとつり

二見浦

郡中東の海辺あり今二見の二村あり又修験二村あり
 和歌深難して名明く此は二見の池と傳てある

夕月夜抄つらととむくしげ二見のうらけりけり
 名考 二見の池と傳てある

天満宮

二見の池と傳てある
 天満宮 二見の池と傳てある

徳源寺

長徳庵 二見の池と傳てある
 徳源寺 二見の池と傳てある

佐吉祠

佐吉祠 二見の池と傳てある
 佐吉祠 二見の池と傳てある

青雲山蓮華寺

青雲山蓮華寺 二見の池と傳てある
 青雲山蓮華寺 二見の池と傳てある

大納言

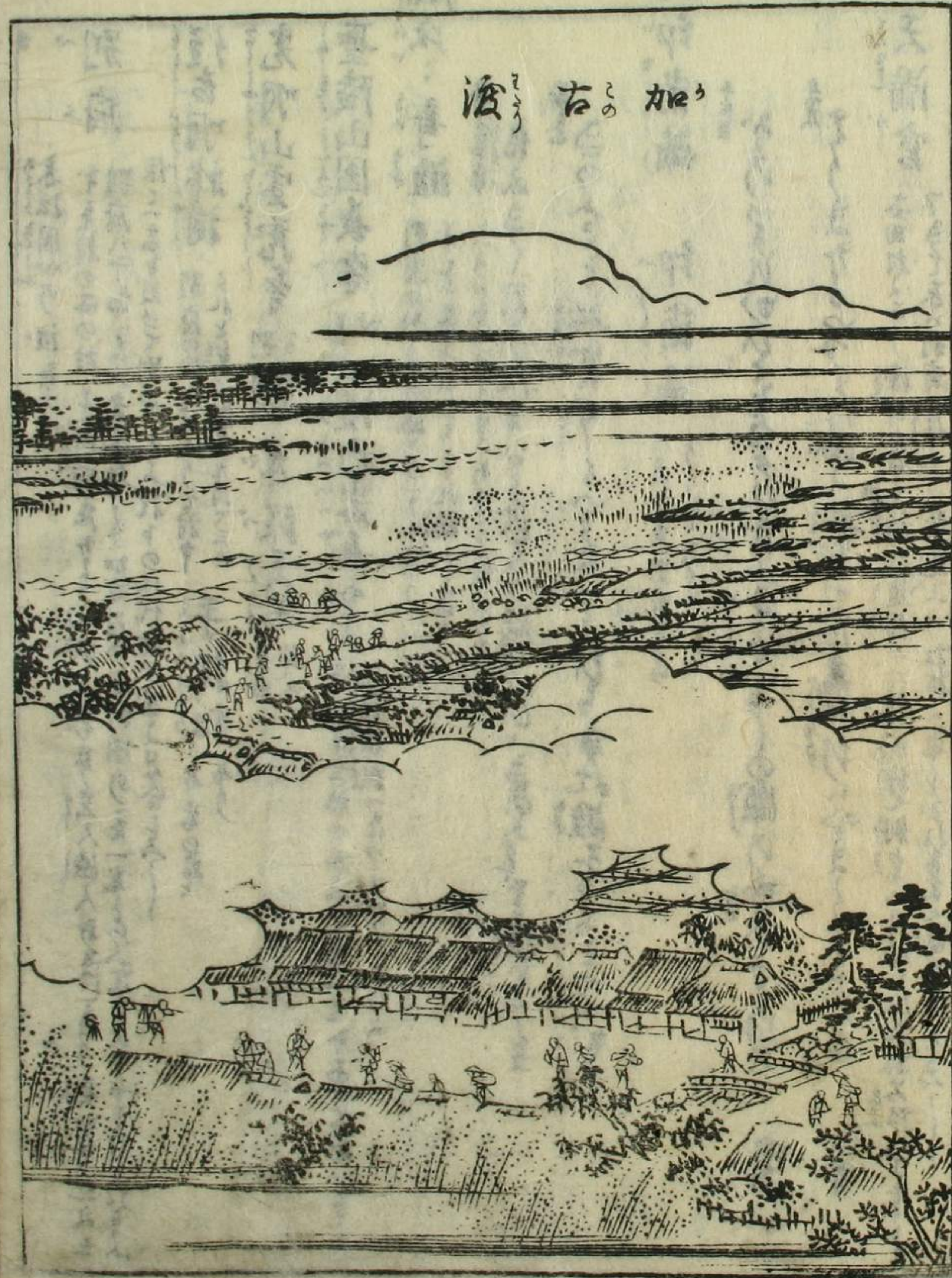
大納言 二見の池と傳てある
 大納言 二見の池と傳てある



日丘社

延喜式津名帳云
 日丘坐天作枕
 比古津社 加古郡
 相殿不葺舎
 王依

加の右の波



加の右の松



別府

赤松園心の地なり
別府の西の村を阿用と云ふなり
別府の千部と云ふ者赤松より加吉川の辺阿用の庄一本と云ふ者二十丁と云ふ者
依て一本と改めて別府と云ふに代り八代村の事と見合ふべし

恒吉明神祠

別府の恒吉と云ふ村なり
手枕松あり

先明山宝光寺

別府村
牛頭天王
寺田

聖陵山園長寺

長砂 境内山石屋あり
寺田三條の画と云ふ者
御田郡政一と云ふ者

法奇灘

別府のやりの海なる所なり
美奈集より自のり此灘と云ふ

青みきく月よはまきこびらうほらひいさのらと云ふ事

きのこをぬきいせういさういしきれ灘をさうと云ふ事

印南浦

印南海
二足を別府の浦と云ふ

かのみやういひと云ふ事と云ふ事の浦の登のりなり

たうまわらうと云ふ事と云ふ事の浦の登のりなり

天満宮

安田村あり後乃言と稱し道神十二村の氏神也
八月晦日松林に抵八丁と云ふ事
下きて亦別府の儀なり
西尾上の松林に近しと云ふ事と云ふ事

尾上天満宮

田村 生竹山観音寺
同村奉る観音堂
十七日人稱念に

尾上松

尾上松は長田の庄
社記云播州尾上の神功皇后三韓征伐御帟朝乃後恒吉の御神と

恒吉明神祠

大原大明神
別家八月廿日

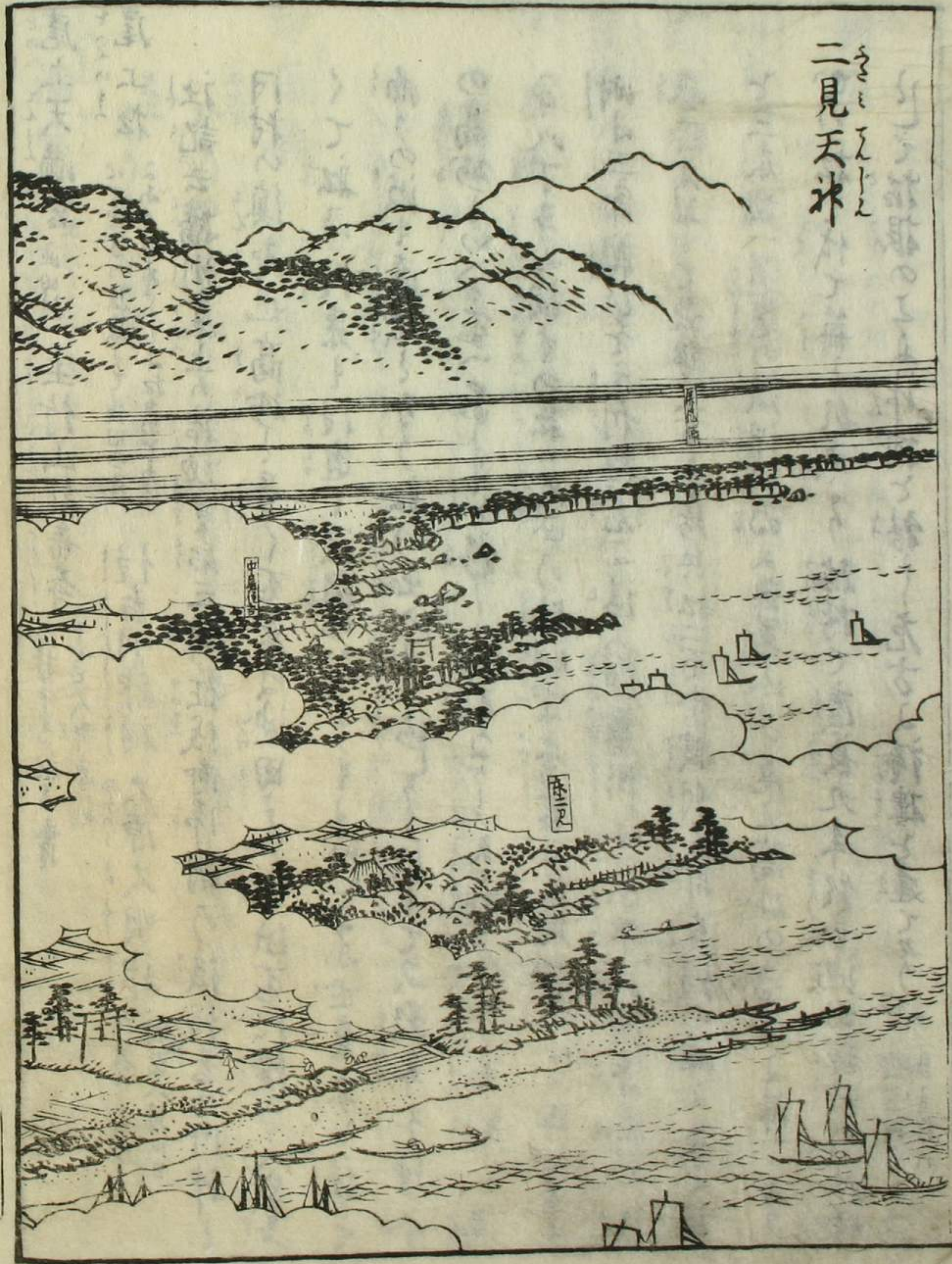
日村の鎮座也高砂と号く石原は池田より水に流るに續き人家多
くて松乃彼来り恒吉と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
ゆりの波も遠流と云う松の出入もよしと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
の高砂といへる松へ家と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
り八丁斗之相士の松に天の乃比羽柴秀吉三本城別所小三郎と云ふ事
附小三郎松を毛利輝元と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
赤西大將と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と三本城へ運送の後浩の乃無軍今の尾上高砂の地なりと云ふ事と云ふ事
か乃松と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
として松根のよき神祠と稱し左方は護摩と建てたりと云ふ事

松乃松の
松乃松の

所名

所名

所名



二見天沐

別荘

佐吉

松の林に
て幹の権虎の
路のてく

枝葉のゆき

園の二十歩

耳の二十歩

右の六余

あき靈石

カ



江亭

松の遠く

松の遠く

今朝の

雲

池水

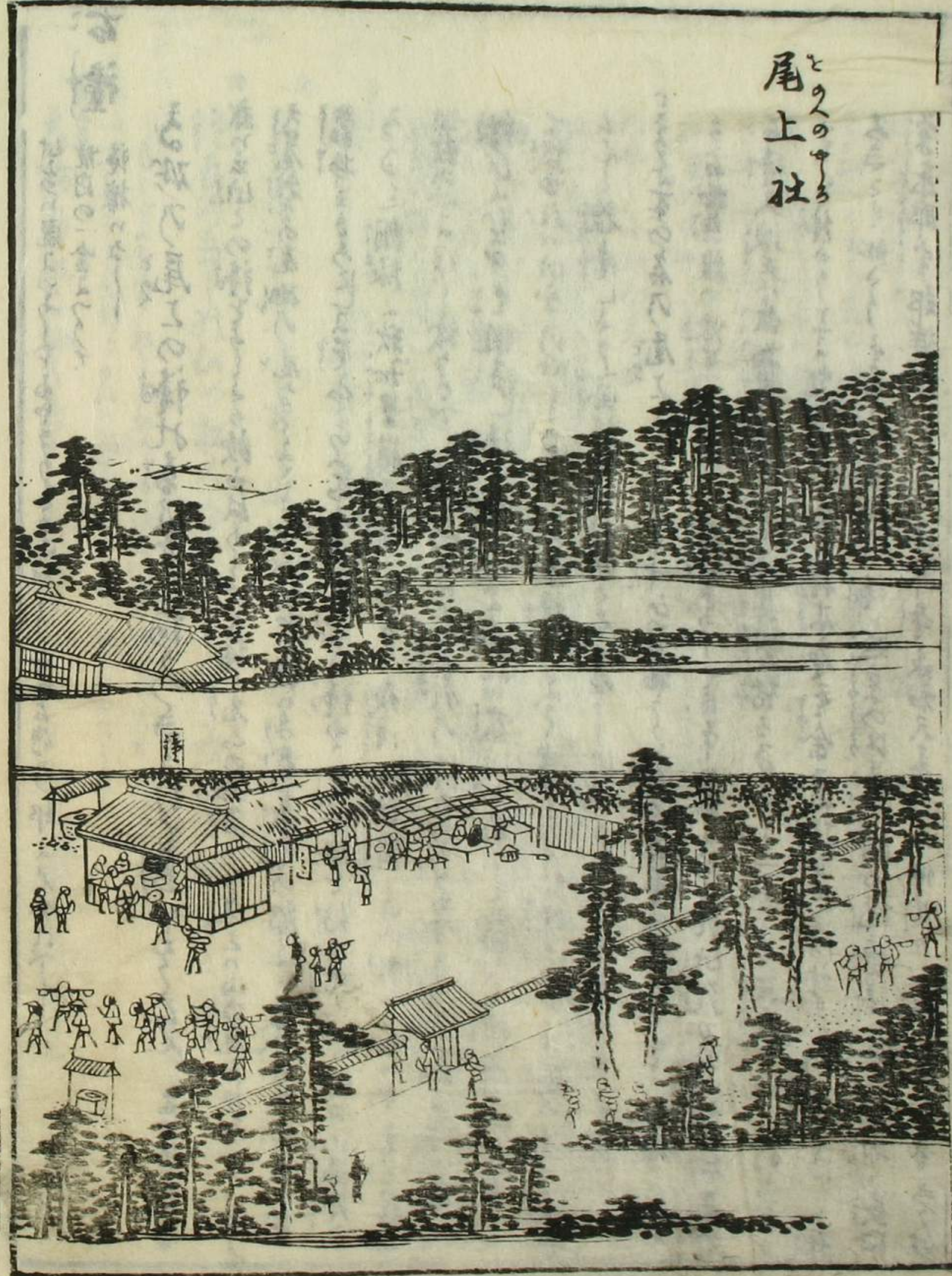
別荘の巻

別荘の巻

別荘の巻

久





江戸一かゝりありて浪花を遶る不あり 橋本大平十年の事号抄にありしに
 たり是西番二世惠帝の付より日本寛政九年まで三百九十九年と後
 の日本永和八年より二百余年之先を以て尾上刀回山の二種とせしむるに
 百年来の物は見えたりとされしは百海より佛經と始て日本へ後で一
 明天皇十三年より元久二百余年ありしとされしは佛經と始て日本へ後
 後より元久二十年斗後の子にけりといはるる百海或は異國よりもの
 徴とて造りしといふ故とせしむるは佛經といはるるは尚きりかの後世
 又天王寺六宗寺の傳といはしむるに漢後の傳といはるる竹筒の形に
 物とありしといふは珍言よりいはるるに三寺寺儀表の若くは
 児婦の耳と尋ねのといはるるは珍言の次にき物といはるるは中
 國の耳といはるるは珍言の次にき物といはるるは中

石 尾上林の田の中より 俗にたまに小松といふ
養田祠 尾上村より 氏祇の氏祇といはるる三神
今津川 尾上村より 尾上村の河よりいはるる川ありしといはるる
高砂 尾上村より 尾上村の河よりいはるる川ありしといはるる
高砂泊 尾上村より 尾上村の河よりいはるる川ありしといはるる
高砂 尾上村より 尾上村の河よりいはるる川ありしといはるる
高砂 尾上村より 尾上村の河よりいはるる川ありしといはるる

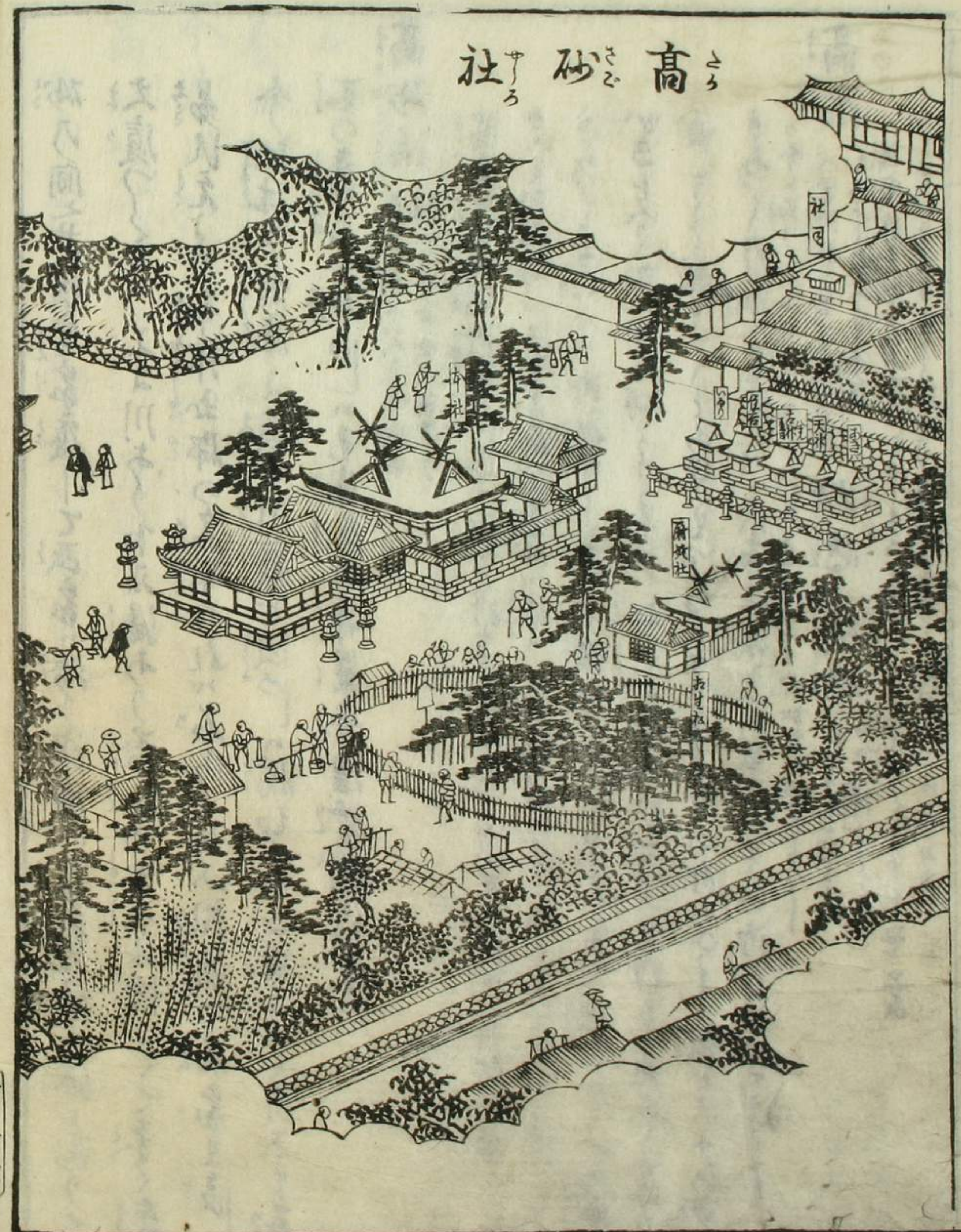
砂の向之其後官家廢して民家に砂の浦國の通商大場の濠とありて
 大度つちありとよ川ありとよ海あり系船の出入り便してきてきて
 易いえより本邦出郡の名不なり名なり一抄に凡流の名家と
 今松林を倉庫と換て凡藤と改めしに惜むべきは甚なりこれと名
 石の舊名と抱きしは南朝の津置守備堅固の地
高砂泊 尾上村より 尾上村の河よりいはるる川ありしといはるる

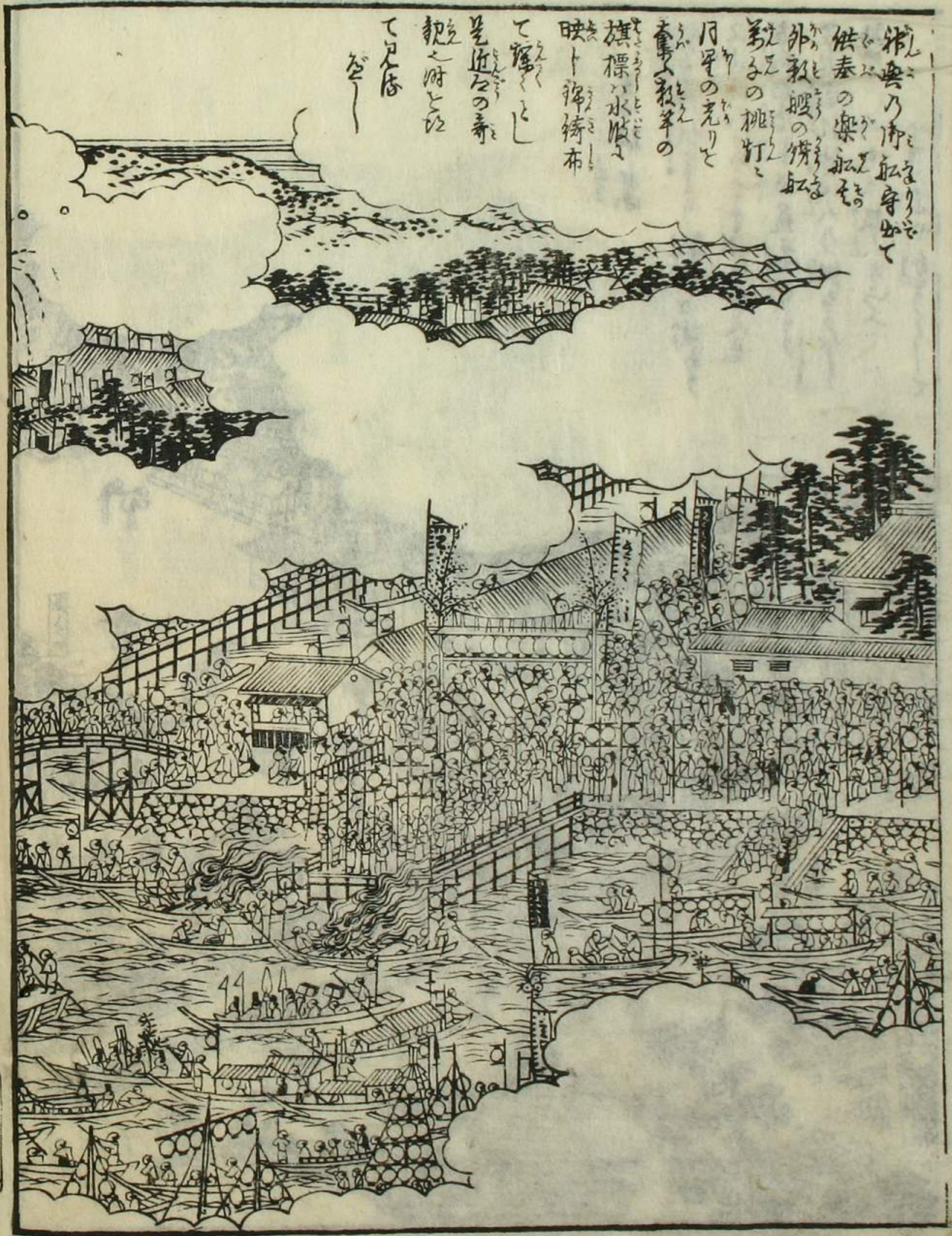
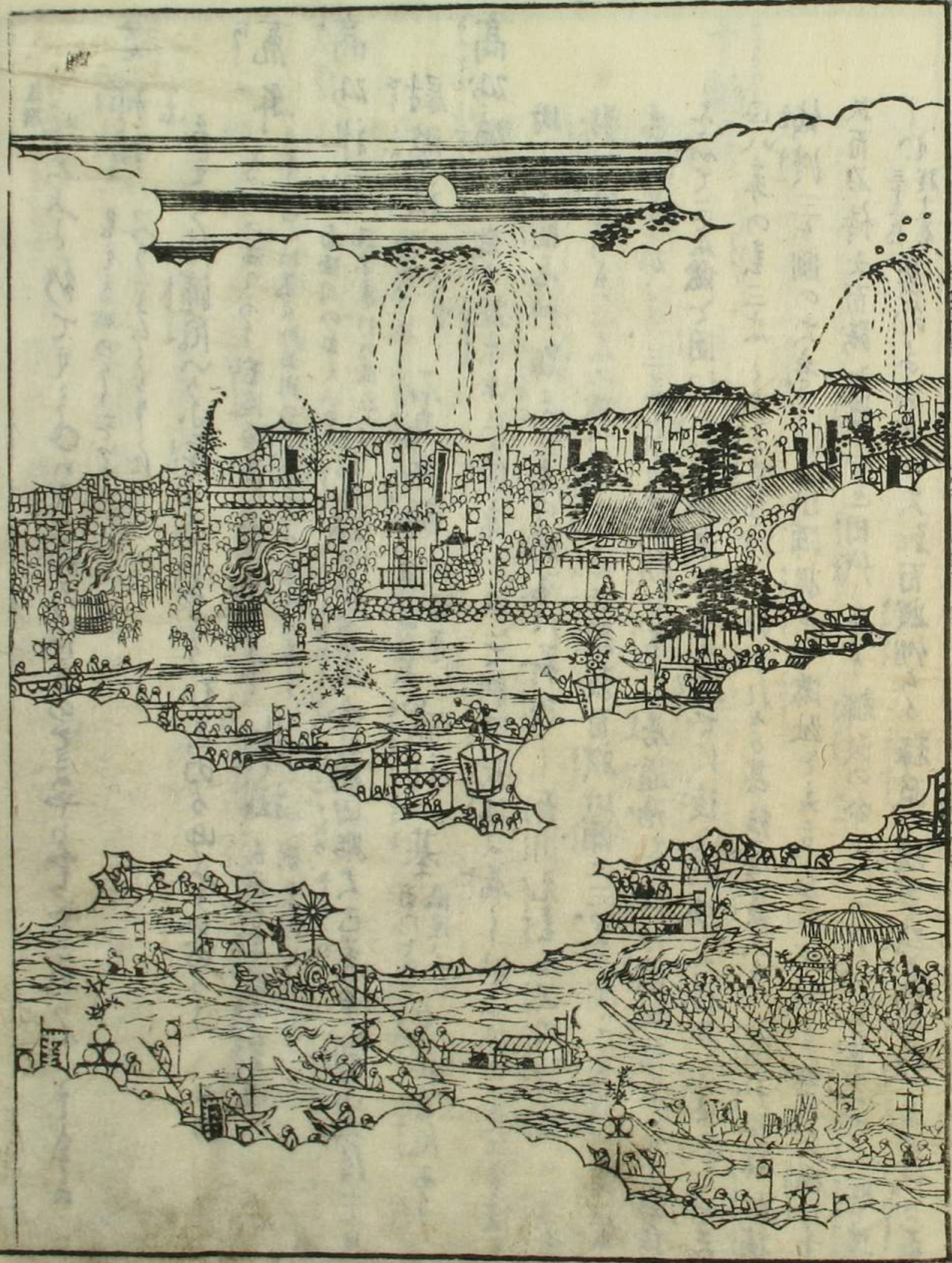
高倉院殿跡跡津幸の記よりわづらうりていはるる高倉院殿跡跡
 高倉院殿跡跡津幸の記よりわづらうりていはるる高倉院殿跡跡
高浪 尾上村より 尾上村の河よりいはるる川ありしといはるる
高浪 尾上村より 尾上村の河よりいはるる川ありしといはるる
高浪 尾上村より 尾上村の河よりいはるる川ありしといはるる

高砂の御祭
 又此所は御祭より親樂の御あり
 右岡原に在る御祭の御あり
 左に御祭の御あり
 御のこしづも御人をもつて
 ○ 十月の忌やあつて



高砂社





後撰
物ぶくちゆてしよりの浮乃にまのこまやららやまぬらん
本綿崎 見しき砂のうらそく
之まは浦風へう小をうんあうむはあゆみたのう 西行

荒井 多砂の西より昔陸をさしお上りしと
神社 氏神は荒井大己美命 例祭九月九日

高砂津祖 南海川の南天の比 祭津素戔嗚鳥命 禰田姫大己美命 例祭九月十日

尉波社 相老の松 石鳥井額 波持明院殿 河津寺 戒祠二基 南門と出で 祭記里風あり

高砂城跡 城を掘る平三を傍系はして別不長治に属しけり砂のふか守渡る 附は中國毛利輝元三本の別不に河橋し吉川元吉小又川澄素三万余 勢と添らる三本の城へ送り兵糧敷百艘に浦三三里が回し荒瀬に船架 系を寄る砂より三本とのる因所と多く居通治を修め織田信忠三万余勢 を以て三本城と圍む毛利輝元三本と通じ後には浦は月日と送らりて天 正八年の表三本ともは出城しあされ其後慶長八年池田少将輝政攝 備後三ヶ國の大守として浦を掘る城跡と云ふは中村重頼の堀に千 又百石侍士百餘と添らる月代とせり輝政の命として教材と集めて大に造 りし 三十三易 横土嘉 其外は石余の大に百艘にり輝政の婿男武元守輝貞の代日

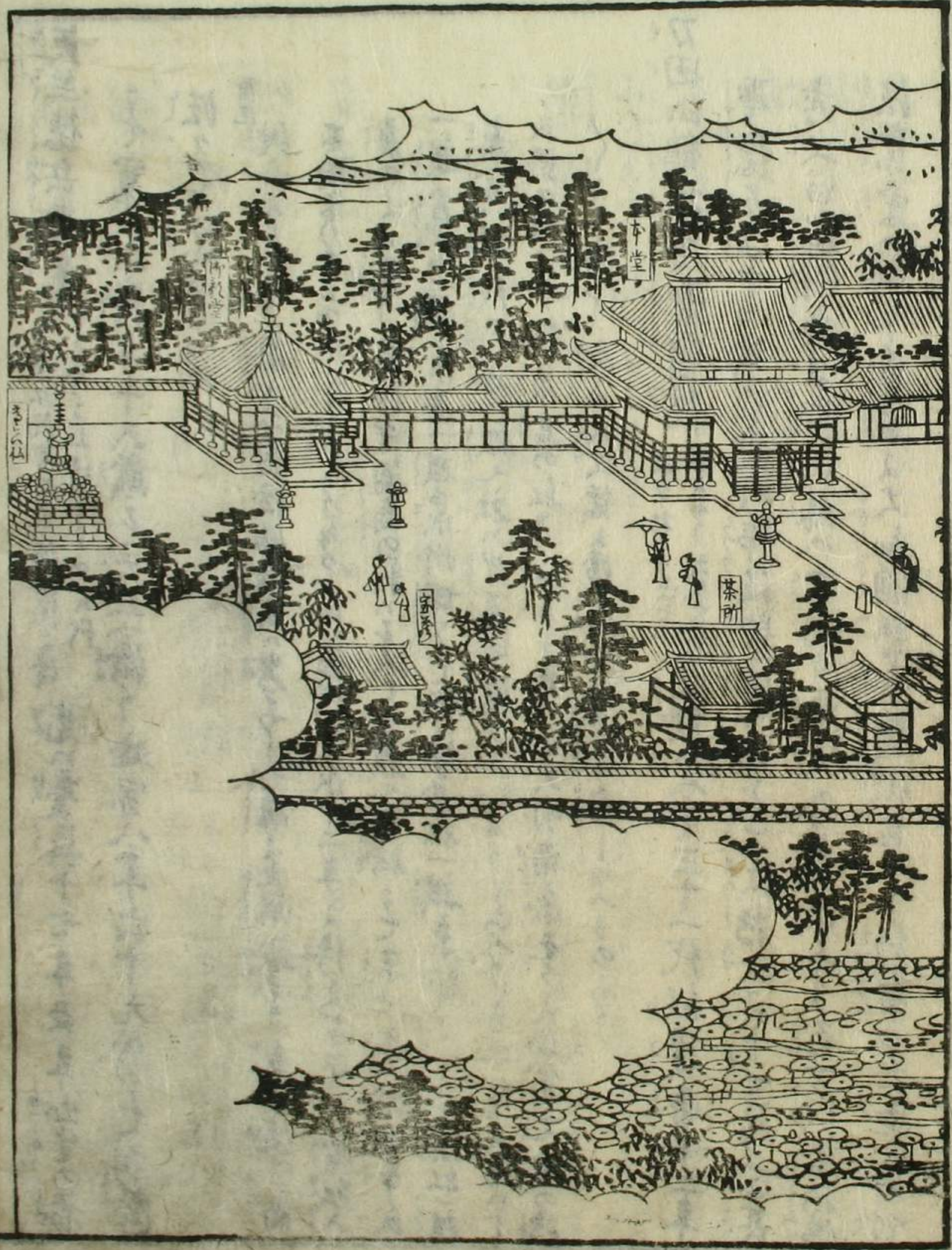
天王と造営ありし
寺名又堀一万三石瓜場りけ浦の守渡城とせり覆郭石壁堅くしと本 戸を十一口又定り又其後元和年中本田忠政これを破却して出浦る年既

十輪寺 多砂村中の 本尊阿彌陀佛 兼阿 祖師寺 因光大師の画教左方は十一面

因光大師之建永二年三月十九日大師満遷の付け浦は打船を考らるしと漢士 治部まのり者も徳又降依はこれとて衆僧の陸吹近郷より及て因て寺 去云宗と改め今西山光明寺東山後樂寺に屬して西山一流の権檀林小 初寺とて大師二十又ヶ所所拜弟三番之吹徳院建曆乃年大師降洛の雨系 又け浦はよきとて蓋念佛衆易の地はあきり改宗は後派浦十万人渡後 小松原洋極寺とて大師室籠り所教とるを得て岡山の中緒をよひ出寺に 納む是に依て地苑山の四号と室籠山と改め美僧門の教を如慈院言一尊法 親王河津等とけ外寺室は長文の教を羅系殿三七室の塔教 大御用 法 河津 連ては是も是 河津 の法事は大師遷の附の月よりて三月は執事

天竺月西上人庵室跡 南寺町の 大徳知藏とて右田道灌の嫡孫に徳兼中

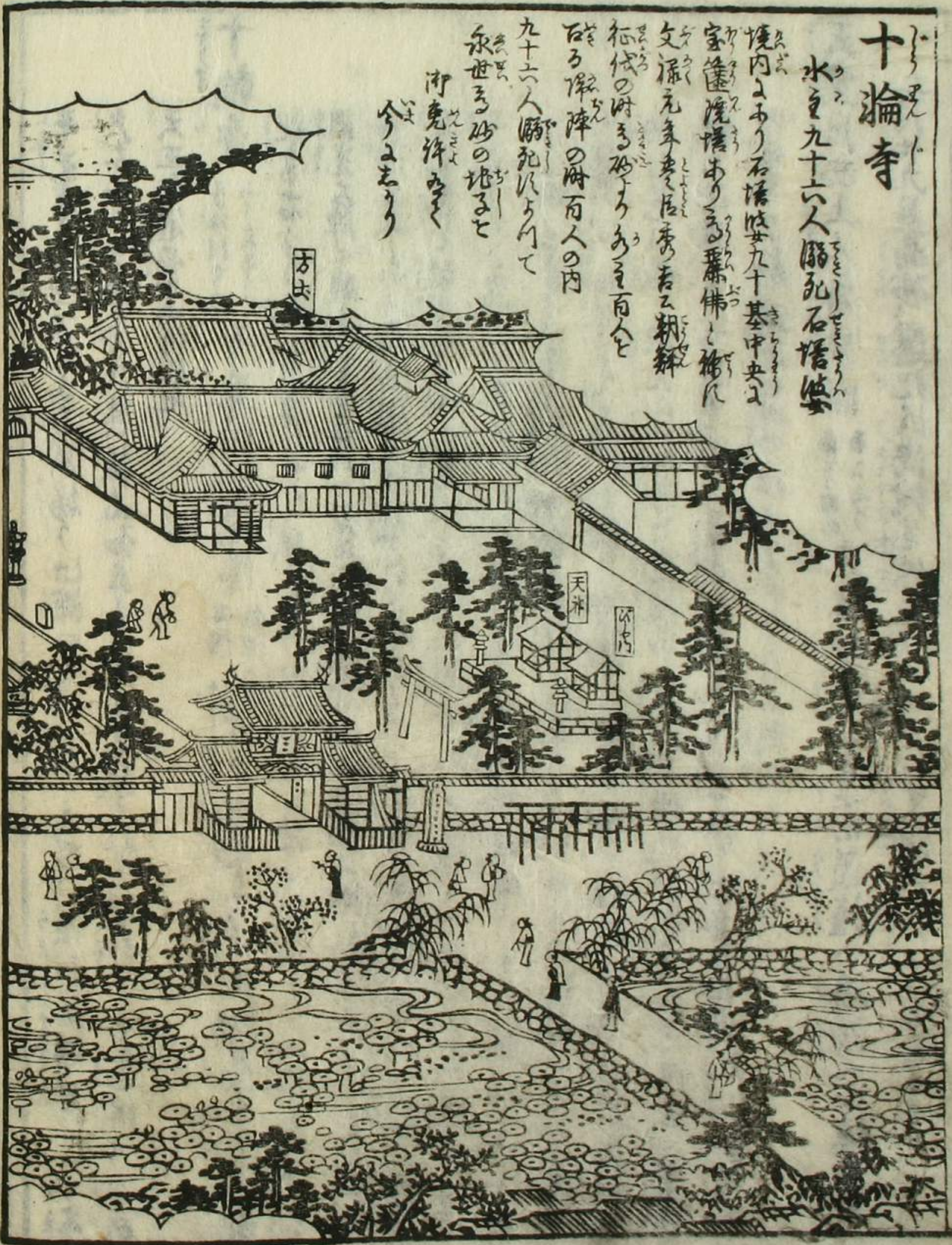
二月廿九日高砂遷化は尚徳生傳の冊子ありて生源の幼状を考らる



十輪寺

水至九十六人溺死石塔婆

境内あり石塔婆九十九基中央に
宝篋院塔あり其階佛と稱凡
文派元々多き居る古く朝経
征伐の時多かりあり百人を
斃る際陣の所百人の内
九十六人溺死以りて
永世多砂の地と
河鬼降り
今もまじり



天竺德兵衛宅

天竺德兵衛宅 先の慶長十七年丑年出立の若
て寛永三寅年十八歳とて天竺一海より延宝八年六十九歳とて刺殺
法名と宗心と云

附記

右周秀吉の討ちまげりたるが所迄代寛永十二年又停止せらるるまで聖船入
貢のくまざり若日本通商の船にとりて九艘之長涉りて末次氏二艘丹卒氏
一艘荒本一艘系屋一艘泉州現とて停棲在船一艘京都とて系屋船一艘
南倉一艘伏見屋一艘之船の中島の造り又何れと云りも砂徳多備の十
八歳の討より彼南倉の船乃水至りありて大明南系をくみ品定て寛永の徳
くまざり通るなり天竺徳兵衛と云り其國書と云りあり

刀回山鶴林寺聖靈院

聖徳太子十二歳の所附佛法興流の地と云文將士とトセ給ふ其
考文曰攝州鹿野郡山海の中間に廣大の平原あり是乃代不持佛
法繁榮の地と云云云又和國磐余雙樹宮より妙智寺とて遂に用明

用明帝即位二
年二崩御心
十ノ字ヲテラニ

帝十二年三月上旬を十六歳の所附け地と推舎と建宮多んと秦川

勝と命じて三間に面り梵宮を營と給ひ教誨三王に天王乃像内

陣のに程より八丈令劉童子の教と圖に據りは三々の佛像と画く

東の方よりその所宮殿あり内には天王乃像と圖と右の方の厨子

あはちる二歳日十六歳に十二歳三歡合終のる像あり即ち太子乃所

頂の發と枝とせ給ふは世と枝繁のまると稱しむる

の遺宮屋敷にぬきは福澤と云ふと云ふは攝州に今今とありて兩尖の打はし是認事之
と云ふ子の昔創より今もと云ふと云ふ二百歳の聖靈と傳ぬまとも圓福の聖はし山山に十方の
己色に二の塔あり是と天王福と云ふ 舊号は日本に箇の道場は天王寺と云
東の地は西の東田南の池田と云ふ野

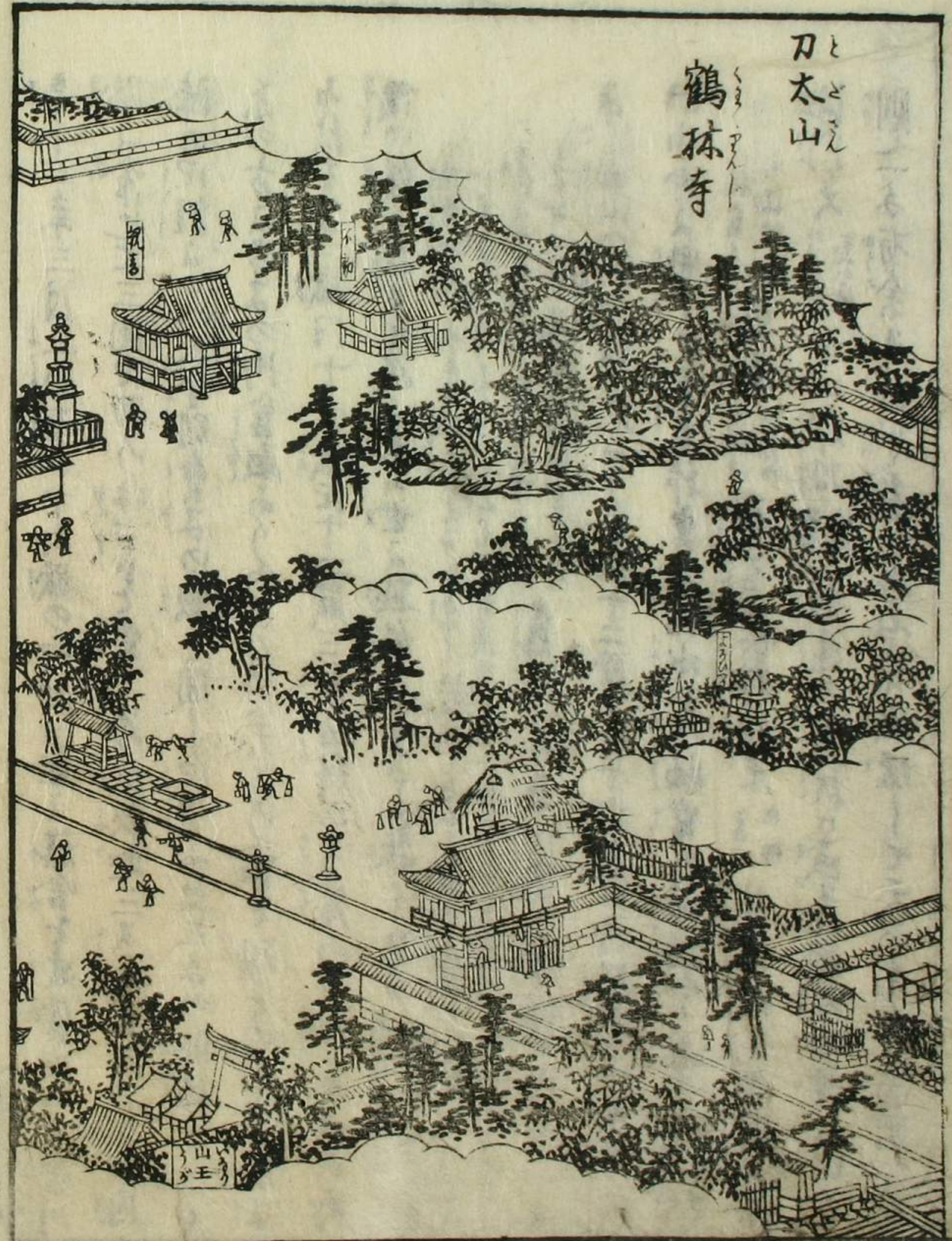
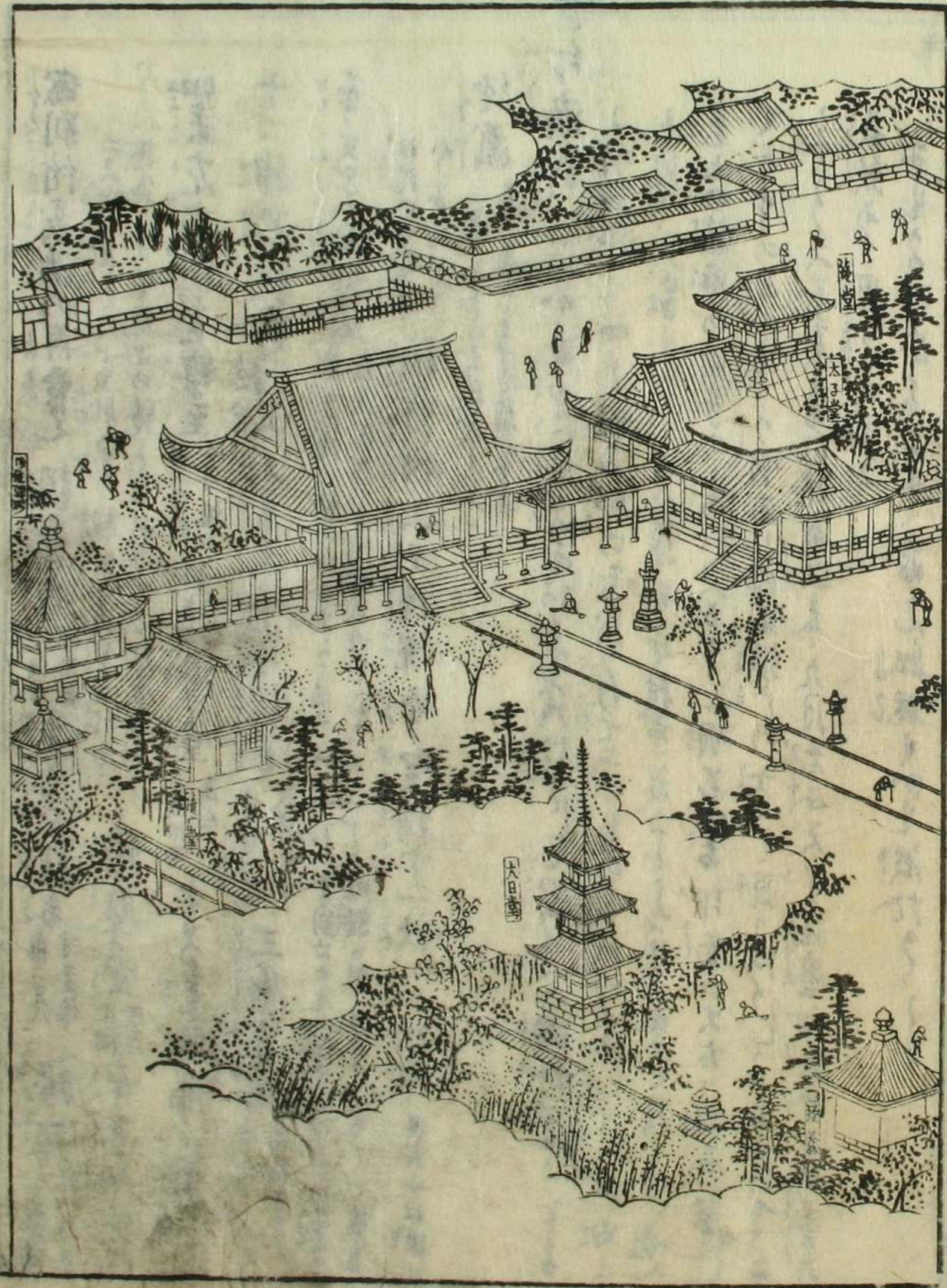
り山山の田記は久うりまも十二歳より十六歳の所附と云り及神人

け山外と鴨下と皇を祇宮石清水八幡宮乃而祠今あり

八幡宮と 佛殿 九間に 奉る 乘降如來 日光月光威臨天恩

湖門天 十二津治 創建の本釈の武苑國大目身人邦春

則之より有餘年の早手おと懸ぬま破壊して天正元年富國二本



刀太山
鶴林寺

城別所長治の再興
親音堂 長三尺 鐘樓 三間二面

如素左右親音惣至
日護摩堂 二間二面 本堂 美佛佛 日光月光

十二神の毘沙門天大黒天千手親音
三層堂塔 東向

本堂六日如来
二王門 會園カニカニ

稻荷祠 山王権現宇賀祠十二社三社神

印南野 此地今野中の清みのりる

又明石郡の西より加吉郡の東へかけて三里半の長谷川に

是上の攝摩の園号の南にありて

長秋あり

五

如右川 川上井田の邊より 郡界を隔ちて

丹波國久下村より

二流ハ丹波水より

山

池大明神 長三丁少其傍に祠あり 野寺山高園寺 日蓮野寺村 八幡宮 野村

山

天徳山常光寺 村 園照山常観寺 村

山

赤松播磨守政村墓

山

印南の編實之

東条川三本川等より合し加古の驛の西より二流あり一流は石の所あり一流は
荒井よりありて流す

まは
まは人の語らうらまはむじあぶまそくる加古川の波 おま

佛頂山稱名寺 加古川 本なる阿弥陀佛 ま ○一鑿山龍水寺 日村

加古川城址 加古川村より八十間四方あり 糟谷助右衛門三本別本乃幕下天心のはる園この
城よりいづれ想息の城ののりなり具又阿のて書寫山は入後を因よまたういて忠を

泊大明神 加古川の南 結正後社殿壯觀ありて紀修國日名宮生石明神の御り
後入るなりとあり社名十六太の天神の龍の探幽門人甲田重信の画あり

糸才天社 中津村あり三方より川あり 中津村あり三方より川あり

本村城址 石碓城と云本村あり 城より南に雁南右衛門に即願承和元年赤松に附後と曹長男
雁南刑部守長享徳三年赤松と修く本村派又即とあり又赤松と修功あり

大津山後田寺 加古川東の端 年より心観音 開基聖徳太子
昔の稲倉と云し後又大津山今大義と云ひて又村名成稲倉村と云又大
津子新村と云古名ありて昔加古川の邊の流と赤松心元弘の流は流す修志
寫の石塔成建る天心の乳と書修徳とて石塔のよしあり又修志中曹洞宗

よびむ古き石塔は印南郡河南庄大津稲倉山と云なり

未田村 加古川の西よりあり 昔の未田と書しは法花山の徳記ありて法道仙人娘の
八十石階 加古川より七八四 川と外田村あり ○羅山神社考曰播磨風土記に八十石階は陸陽

二津及び八十二津の流法之抄に丹波播磨共橋あり云 小祠を差田

此岩橋の山乃藤末より西南よりむうひ登る事二丁余ありて一山一石

をのぼりて降濤にして登る石階ありおは八十のいはしと云道々の

名より津本幣の底天ヶ原津吉の里名と津吉よまき名おまの流あり

目より耳より聞石津縁流くは又石段は踏りて回顧とる小津階

流の辰己よりけりて山と葦瀨よりとく摩耶山乃秋月高野堂の暗

嵐よ心の塵を吹えらひる砂の遠帆尾上の松原は凡人のたはし

いと消をさし流火りぬ火の急なりぬたりしとて眼乳のさるふ

まを定りてて播磨勝系の巨魁とあり

雪を定はあまれば夜白く風と入りたる八十の山あり

右無修無は龍門氏
八条のよりのまを修

まを修無は龍門氏
八条のよりのまを修

八十海原 山岩のふりく小流をく加古川のよと取らよ

益乳山佐伯寺蹟 同基を眼大所 此寺の蹟天正の亂に棄て今三本即久富美長眼寺とす 享徳二年四月廿七日移す

石屋 井田の小山尾村より 戸口一間半あり八尺より一丈内は地中より切く三間半ありて横二間奥へは間あり二間半ありて横二間半あり

腰掛山 若谷の中より腰掛とくくろくろくありて横二間半あり

毘沙門山 天の木の山よりあり自他山の面より 毘沙門不動を彫刻とす地はなまなり

石名井 井名村の西路傍より清水あり 石名井は石名村の西路傍より清水あり

道満法師屋敷蹟 海原津丸の北に丁半岸村より あり今民居あり

妙見大明神 同泉九月十三日 あり今民居あり

津丸村 極慶園風去記曰出雲國阿蘇大津丸和國畝火香山耳利末の三山 相聞とてこれと津丸とて極慶と来りしと國お止しとて今國の地にて其系不の和と覆せて是より津丸とて極慶の止るを津丸の形覆と耳利末と津丸と

かぶやまの耳利末とてありて是より印南園とす

生石明津鳥居 津丸村路傍より石殿とてあり 一道津先古揚

又柱は流あり 華表維石 頤然高岌 確乎不磨 千古雙之

石寶殿 拜巖室と稱は 山腰よりあり 石殿を以て津津とて大と二丈三尺に

方高と二丈六尺とて社楹の形は倍とすと横は倍とすと高は倍とすと

と基も横は倍とすと高は倍とすと

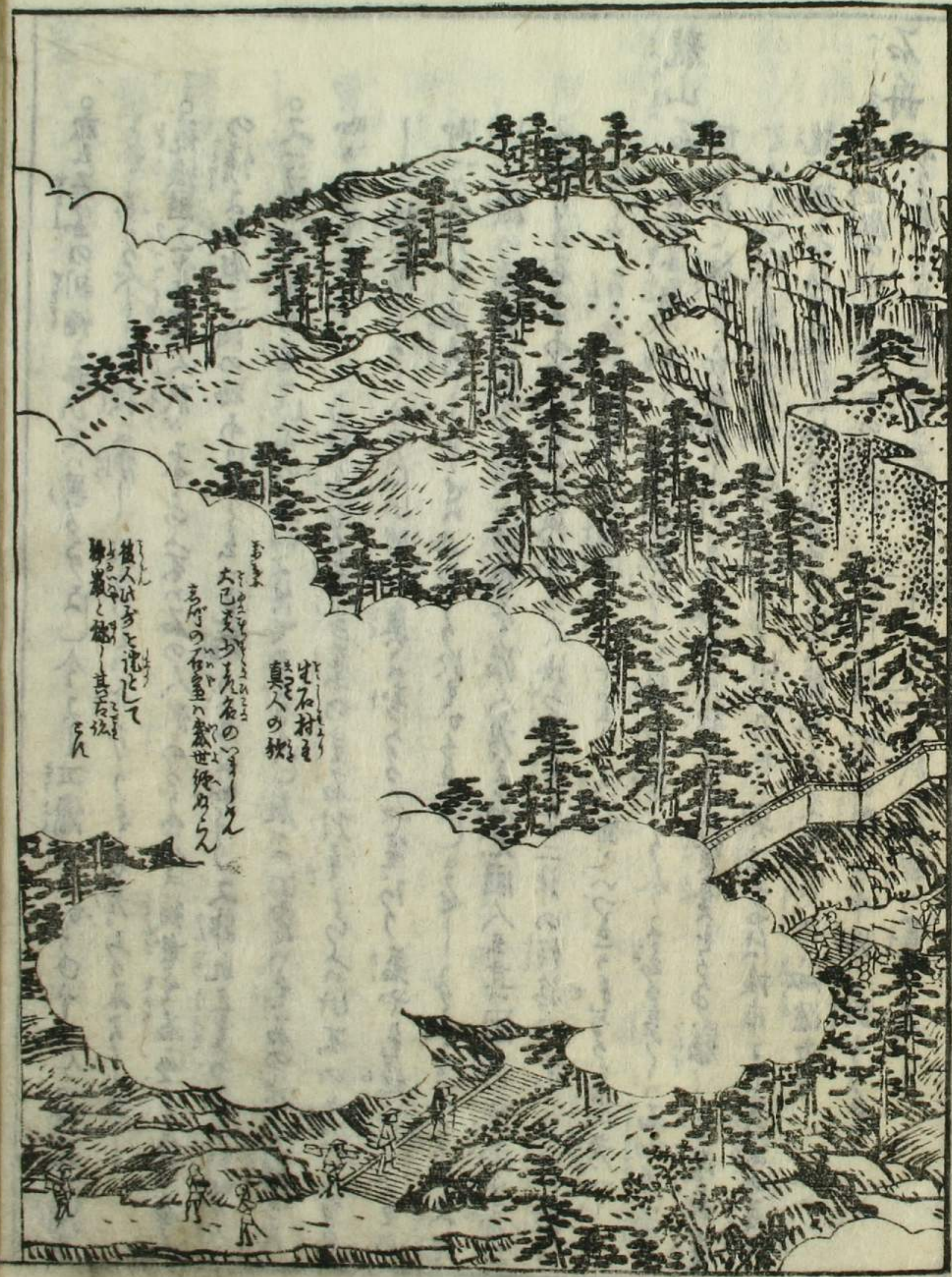
と元よりけ地は近國の名物龍山石殿とてありて宝殿より一箇ふ

余丈の石山の中と切抜即ち切抜する不とて造り其不に削り捨する

とま之と基と根との間に方とと切けて挿くことなり

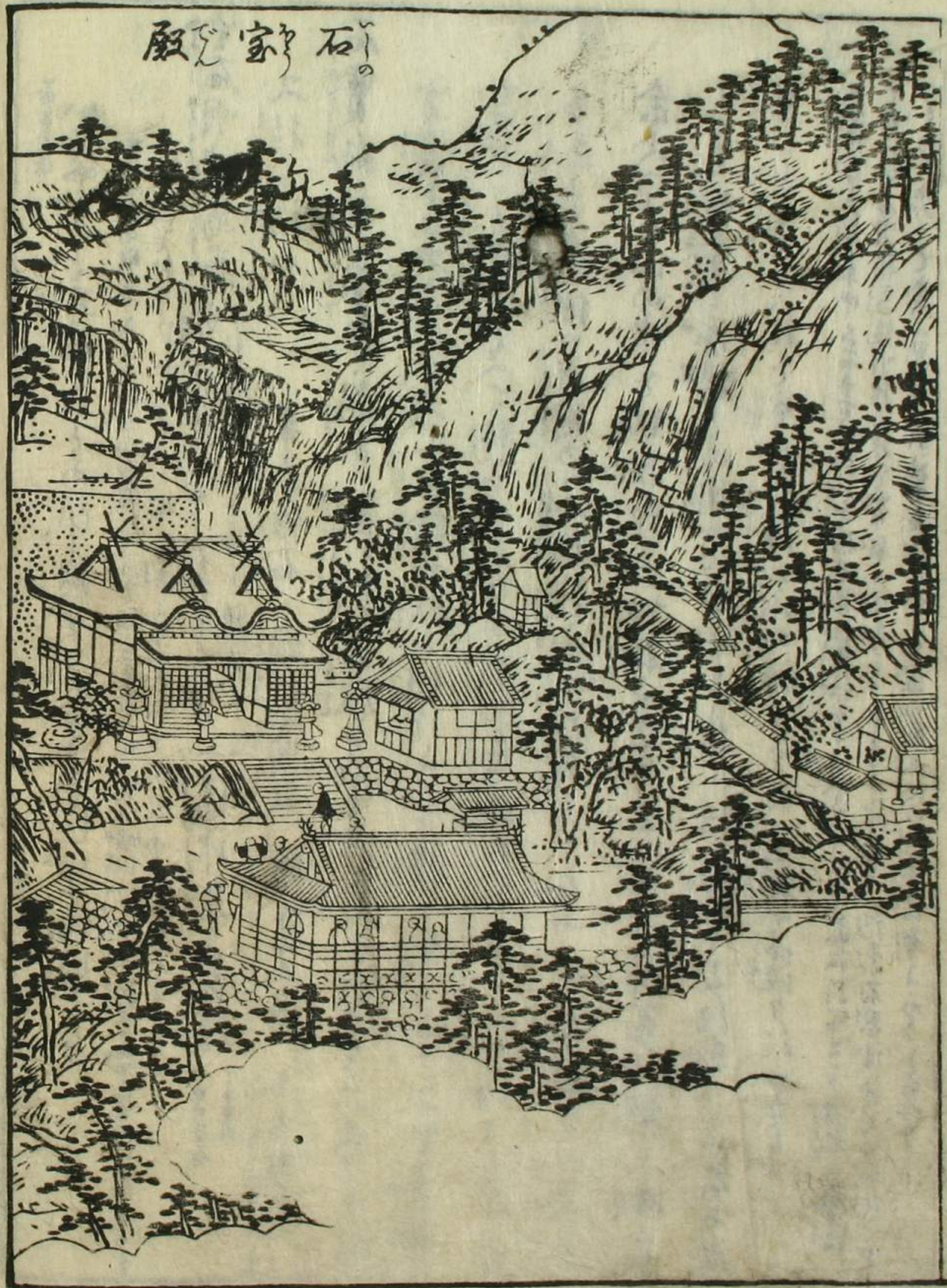
自ら去留して松と生れに固く水の湧くことなり

孝徳天皇御奉中石を其の社に揚げては是を蔵すことなり

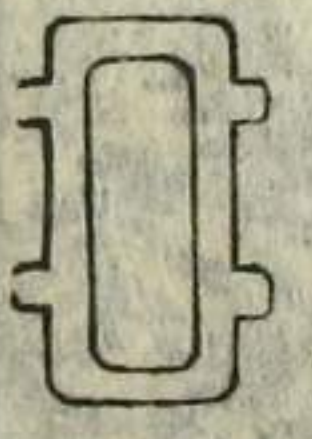


大己美少主人のついで
 志所のいかに至ハ衆世修めん
 眞人の秋
 樹人のついで
 樹人のついで
 樹人のついで

石部家殿



石室の制他は押して異なりはし今より工備がよからんはふも他
 とも異なり一は横に削りたるものありそを老翁のよより一なり
 龍後園と妻郡人形がふとふ石の人形あるが中へ後世を石のよとふを石人
 の傍へ石殿三間の物ありしと云い先鋒が窟へ削り又井九上妻の名はおかし
 又二流は石の石に石の石山に付ての雲を云い流しは宮の石の神と謂うの
 心へ石生石のつらへり地名あり流多美の石村と云いけし石の青の人を云
 一と静庵と云いさるはけ地の奥へさるる石室なり若や先鋒討てたはり
 御一石生石のつらへりせりけりけりかまはしませしりさるるもや又純
 州三徳の石室の秋に付て修勢を人考ふ石見園人云其園邑智郡岩屋村
 又大なり石室あり若老おかし大はれ名表名の二社の修勢へりなり即静か
 石室と云い古く之と云い先流田より二十里舟道都といひたり先はらそ尚考へり
龍山石 石の室殿の遠りい皆け石質なりて堅く穿若り今よりさるる石砌溝海乃
 垣と云い細く切藤の小川より海に又後には方へ質と云いさるる一先慶長以来
 かりと云い藤原の後市村に石工ありけし西へ突橋をば後市とて其南の尾崎
 龍が洞といひて龍穴と云い若ありは龍と云い父即石への海濱なり
石室殿 のふり後の西の若り
 あり長九尺舟楫に尺五寸石室



石室殿のふり後の西の若り
 あり長九尺舟楫に尺五寸石室

石室殿のふり後の西の若り

阿弥陀如来

釋名あり西三村家教り多形身なるい亦亦名と
 つらへりといふなりはしつらへり阿彌陀如来の意なり

道満舟戸

舟の南一丁舟ありは流氷は早云い酒なりは
 舟の舟の酒なりは流氷は早云い酒なりは

流臺

舟の南一丁舟ありは流氷は早云い酒なりは
 舟の舟の酒なりは流氷は早云い酒なりは

白文薬師

中筋村の本地尾村ありは流氷は早云い酒なりは
 舟の舟の酒なりは流氷は早云い酒なりは

遍照山時光寺

舟の南一丁舟ありは流氷は早云い酒なりは
 舟の舟の酒なりは流氷は早云い酒なりは

阿弥陀如来用基時光上人上人信住り多田満仲九代の孫源光舟御
 かり天福元年三月十日武庫川の邊り澤橋寺西山上人の舟子と云
 時光坊と号け高徳と云いり感徳の阿弥陀と祠りて建長元年

曾根の社り西へ往かんと建て後文永十年六月十日今の時光寺に後
 一尚旅客結縁の所と云い舟を阿弥陀如来と改む近村は時光寺を安

時光寺なること乃名あり曾根天神の舟の徳寺と云い辰内正月の松
 飾禁じて今と云いり

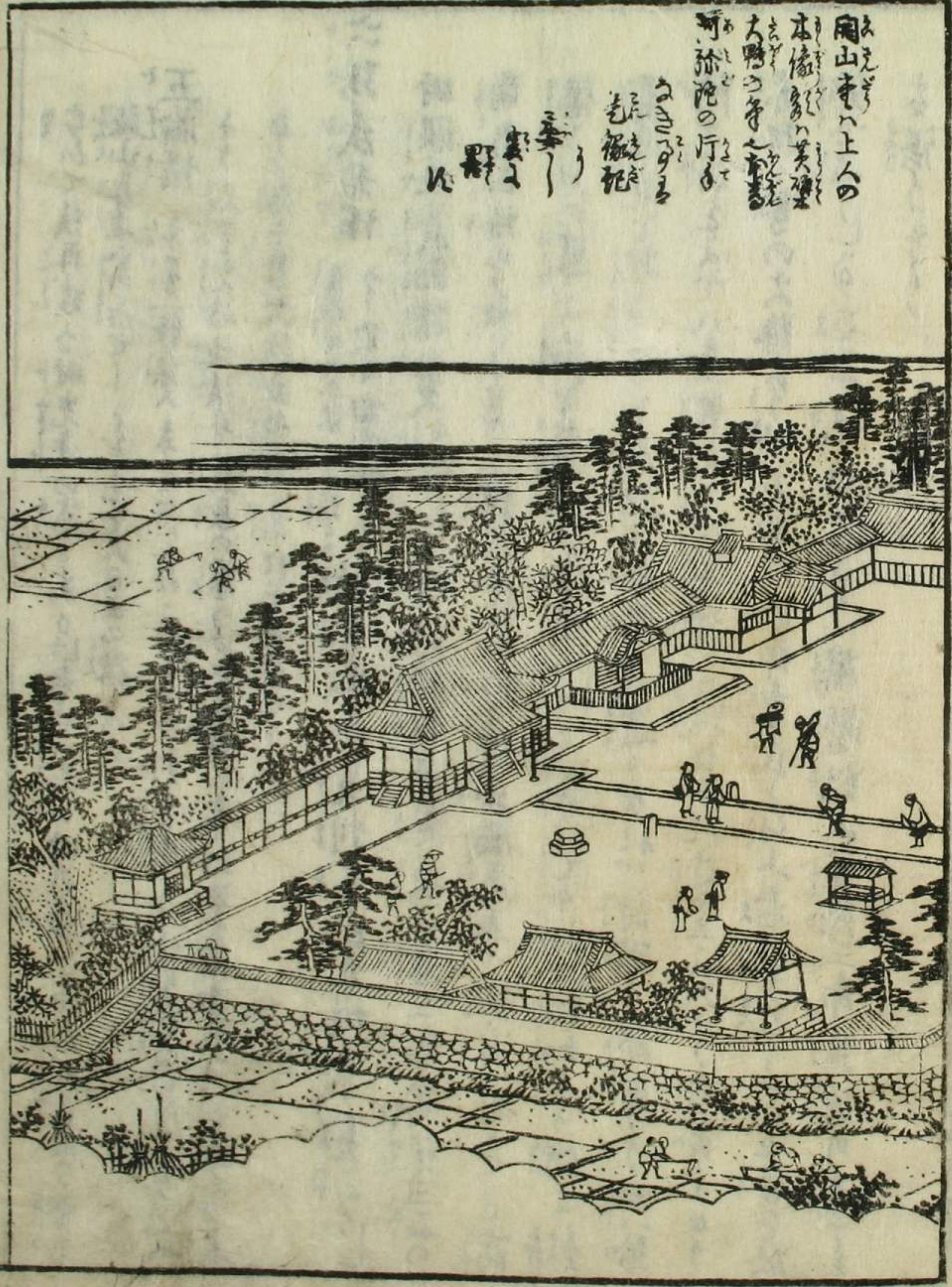
岩尾山大日寺 西へ往かんと建て後文永十年六月十日今の時光寺に後

一尚旅客結縁の所と云い舟を阿弥陀如来と改む近村は時光寺を安

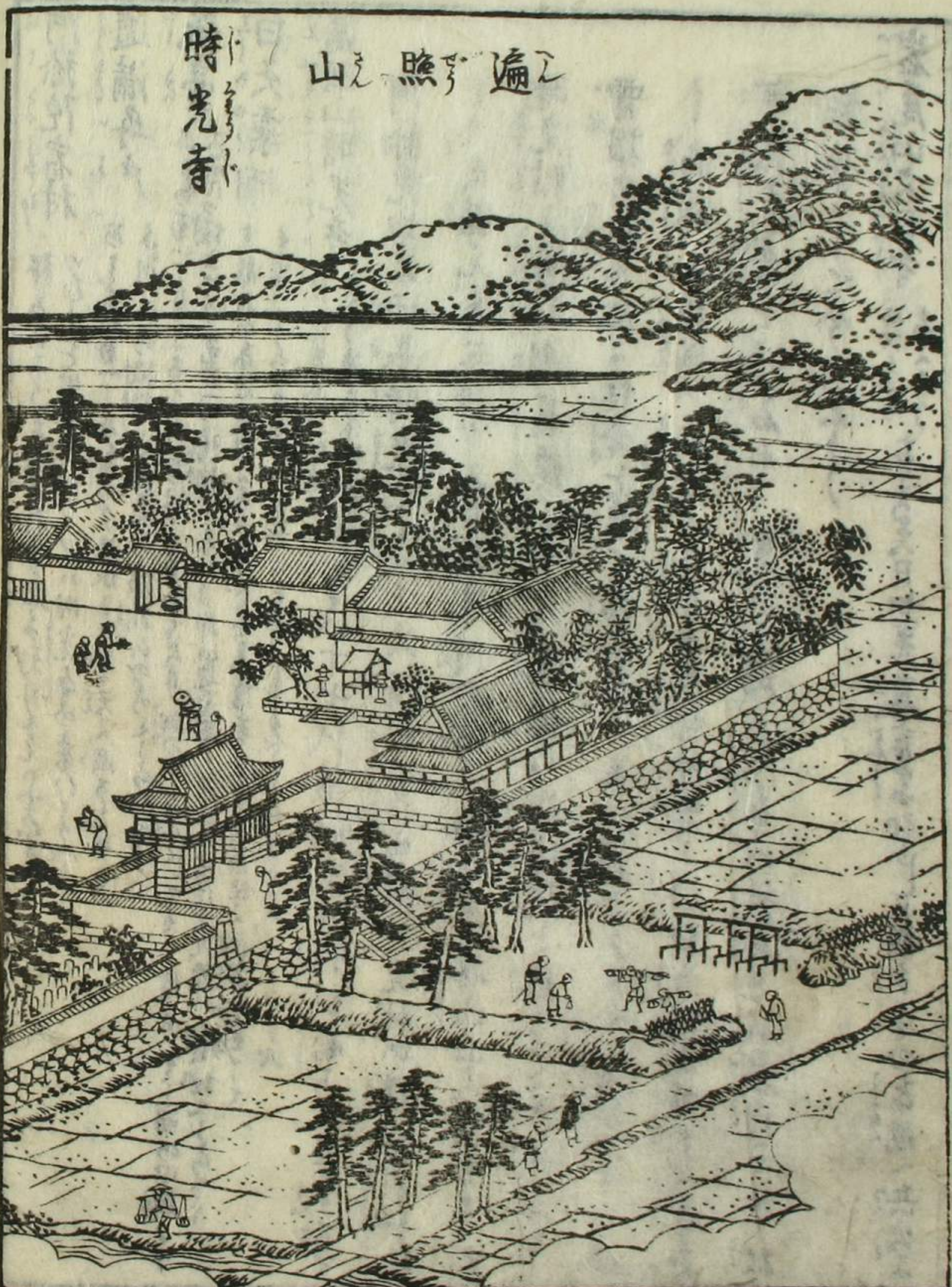
時光寺なること乃名あり曾根天神の舟の徳寺と云い辰内正月の松

飾禁じて今と云いり

岩尾山大日寺 西へ往かんと建て後文永十年六月十日今の時光寺に後



用山寺上人の
 本徳の美徳
 大徳の美徳
 可憐の行も
 毛徳也
 毛徳也
 毛徳也



遍照山
 時光寺

ちいて後再建の時光寺の末とあけ寺荒廢の時りりる別不長流の幕下
後山近寄居せしとを先と大目山の構より

五輪塔 年号不詳天保六年三月之外に更なる刻を明らる一は衆生の二を身入
り君是児侍侍後守能長の墓より集長三年に地は前宮のりる平元入
ぬり尚下の六騎武者の案に合はる

六騎武者塚 延元元年足利と氏九州より来りし
時服屋義助播磨列はし又児侍侍後守能長子息三郎高德三石の
南の山治を夜もとがり捕てさじの浦へ出臨屋敷又退付んとせし高
徳より軍と病と蒙りたるが因うくあつてがれが相知りる僧又我
番邊にあつたと赤松が兵治兵衛よりこれに討破り那波より阿弥
院が石とよ十八度戦ひ後六騎討らるは堂へ入る自害りたり
赤松が勢の大勢守孫左衛門治郎重氏より希葬れして送骨と故
郷へ送りしりる平記より入る播磨記又故後三郎高德の墓と
を語りたり

赤松が勢の大勢守孫左衛門治郎重氏より希葬れして送骨と故郷へ送りしりる平記より入る播磨記又故後三郎高德の墓とを語りたり

赤松が勢の大勢守孫左衛門治郎重氏より希葬れして送骨と故郷へ送りしりる平記より入る播磨記又故後三郎高德の墓とを語りたり

安養寺 延元元年足利と氏九州より来りし時服屋義助播磨列はし又児侍侍後守能長子息三郎高德三石の南の山治を夜もとがり捕てさじの浦へ出臨屋敷又退付んとせし高德より軍と病と蒙りたるが因うくあつてがれが相知りる僧又我番邊にあつたと赤松が兵治兵衛よりこれに討破り那波より阿弥院が石とよ十八度戦ひ後六騎討らるは堂へ入る自害りたり赤松が勢の大勢守孫左衛門治郎重氏より希葬れして送骨と故郷へ送りしりる平記より入る播磨記又故後三郎高德の墓とを語りたり

延元元年足利と氏九州より来りし時服屋義助播磨列はし又児侍侍後守能長子息三郎高德三石の南の山治を夜もとがり捕てさじの浦へ出臨屋敷又退付んとせし高德より軍と病と蒙りたるが因うくあつてがれが相知りる僧又我番邊にあつたと赤松が兵治兵衛よりこれに討破り那波より阿弥院が石とよ十八度戦ひ後六騎討らるは堂へ入る自害りたり赤松が勢の大勢守孫左衛門治郎重氏より希葬れして送骨と故郷へ送りしりる平記より入る播磨記又故後三郎高德の墓とを語りたり

赤松が勢の大勢守孫左衛門治郎重氏より希葬れして送骨と故郷へ送りしりる平記より入る播磨記又故後三郎高德の墓とを語りたり

佛心寺

釋万より一丁斗南小林村
付寺の境内にあり五輪塔あり満仲り石
塔よりい佛心寺元奉^元五輪の石又同東の回乃の古手より石塔を
掘り其古手の昔より佛心寺の法守とらひて正月奉り改うは供膳
なせせしむなり

安養寺

後居村 粟

梨原寺

佐古村 淨土宗 嘉永二年七月六日 地那編
とる文書 二年 文書 法印 佐古

伊保寺

荒年の西より今も遺跡とら昔の伊保の遺
とて大社の跡より今も新伊保の村あり

加茂明神社

日向加茂よりあり昔村中よりありてそ伝承は嘉永年中
西頼明大社と実連御のよりあり日蓮宗の教を山より移す

此よりしに社とらる中よりきてと昔乃社をあはえ
大正書

所名

飛錘塚

右中りらの西より法華山の崩れ法道使
は塚の上より御と遺る元事釈とるなり

高煙石

仙人とらんとて中
高煙とらんとて

因堂

奥蔭村より石佛のありて法あり是の時上人功徳の寺
ありてありてと相しありてと入庵光るの地記ありて

梅の舟

一名石蔵石のありて奥蔭の舟より村中の社
のありてありてと遠くありてとあり

曾根天満宮

曾根村 縁 菅公の靈
元天徳元年 右後田天徳
は里の良神とて御奉九月十日

延喜元年菅公能^菅一請遷の時^神に^はけ伊保の^渡とせ^は社

より一丁斗西捨美の園に^は方^の修^勝勝^足と^は又^は伊官と捨美天中

とし^は禰^一なる天^心六年豊臣^秀吉^の再^官と^る

境内^攝社^の園^と又^記以^本官^と天^徳日^命と^祀と^らは^る伊^官と^らは^る

伊^官と^らは^る

菅原道真^の三^季議^是善^弟三^の子^之十一^歳ありて詩とほは

月耀如晴雪 梅苑似照星 可憐金鏡轉 庭上玉房馨

貞観中文書には奉らんとく下野掾と撰く及第ありて金葉ありて少内

記に然に魂研帝位即位詔ありて及第ありて萬徳の政を

撰り心三佐と撰く中宮と撰と撰く昌泰元年内覧の宣旨と撰りて右文

居し拜せしるけ時表とて是と辨をれと徳は三年國向くみん云道真
國く辨して爰に且奏曰今且と召してさき時の人必これと候ゆ人
て春日柳眼中の詩と候して歎きこまう因て帝法皇各御衣と賜入
て召さうり尚御衣の厚よりて時平召さるる候ひしりて國向の報を
をばて拾心は候ゆ時源光の帝の舅之又召さる候の事ありと
とも道真下より召さるる候とせはるる召根より道真と候心あり
初めて時平召さるる事と候ひ候とも道真と稱す候ゆ或時時平召さ
して曰道真が女は世親王の嫁とらるる候ゆ或時時平召さるる事
國向を思ひ候ゆ心ありと候ゆ帝は後又召さる候の事ありと候ひ
後ひ延元元年正月壬寅時平召さるる事と候ゆ道真と稱す候ゆ
子孫に及和歌をばて候と法皇は所は法皇召さる候ひて是と候ゆ
之とも是言菅根過して通ひたり其う道真の子男女二十三人皆
異ふに候せらるる唯小男小女の道真と稱す候ゆ梅ありと稱す
又候んで花と開けり因て和歌と候ゆ、東風ふはかりの梅とせよ梅の花あり
なうとくまうと候ゆと候ゆ國若其猶心候と候ゆ是と候て中明石の譯長又
不居して菅原の女を召さる候と候ゆ類聚圖生二百卷又新撰菅原集法明抄

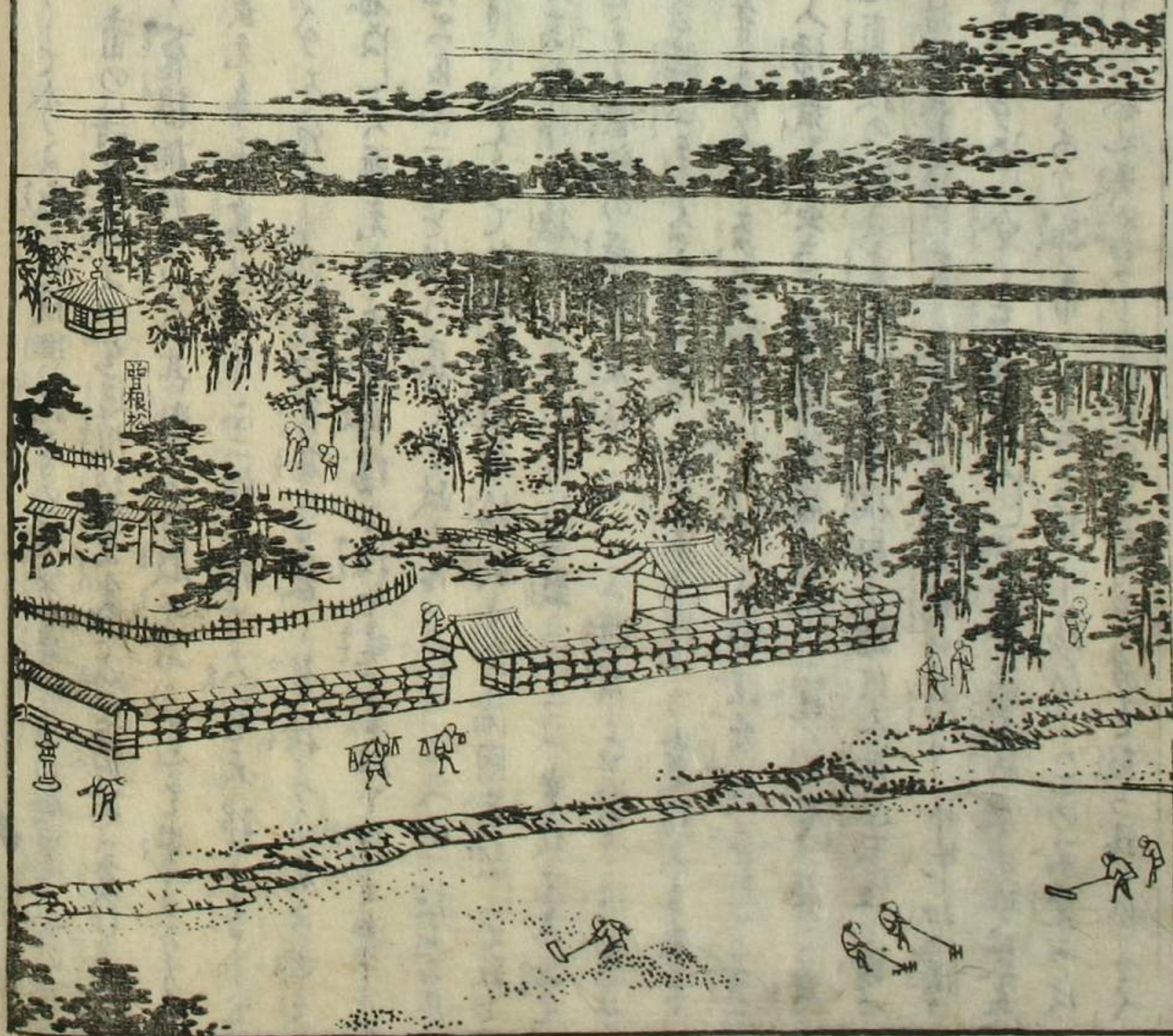
菅原日記等の書と撰て今も存候後興福寺の傍實建入唐の時道真及び
長谷雄攝度相都良香の詩集希ふ小抄通風抄等とて彼地は廣道真
薨して七年後一時年菅根相候て以て其時系所叙あり是を菅原の
以帝後注と候て延元元年壬寅二月二日と候ゆ大富天作と号して
左遷の宣旨及道真の書を記せし外記の書物多々悉く焚捨り候ゆ世々
其詳方るるを知らずは天曆元年右近馬場と候てこれと候ゆ小抄の
社と号し正暦元年壬寅二月二日と候ゆ是と候て右近馬場と候ゆ
菅原朝臣と候ゆ八月に日をもておれと候ゆ後創りて諸國奉獻して社と
建ある画像と候ゆ天曆天作と候ゆ廿二社の教に入らる實弘元年御
小抄社より奉あり是より歷朝の奉幣不絶 又厚衣とあり厚衣は
在持とあり在持の多浦正光とあり其業と候ゆ實弘元年薨じ
年八十歳薨じ妻樂寺ありて多宝塔及胎藏界入佛法奉經ふ紀と妻
して名けて東塔といふ傳説と候て是と候て寺務法規三卷と撰て寺務
心後人け人の祠と道真社の例と建てゆ中宰相殿と稱し元年二月三日と候
附記 或曰く世々雷神と稱し薨後内裏に雷神の祈ると候と候ゆ
修りて是記縁國史より云々あり今も妻言あり内裏に雷神ありと云々
なり菅原の薨して後十六年あり抑帝の謗言と信し候ゆ云々の不幸は
此後帝の不幸とせ記し命は是言不幸の世の世に帝衣の力を候ゆ

曾根

天津

曾根の松

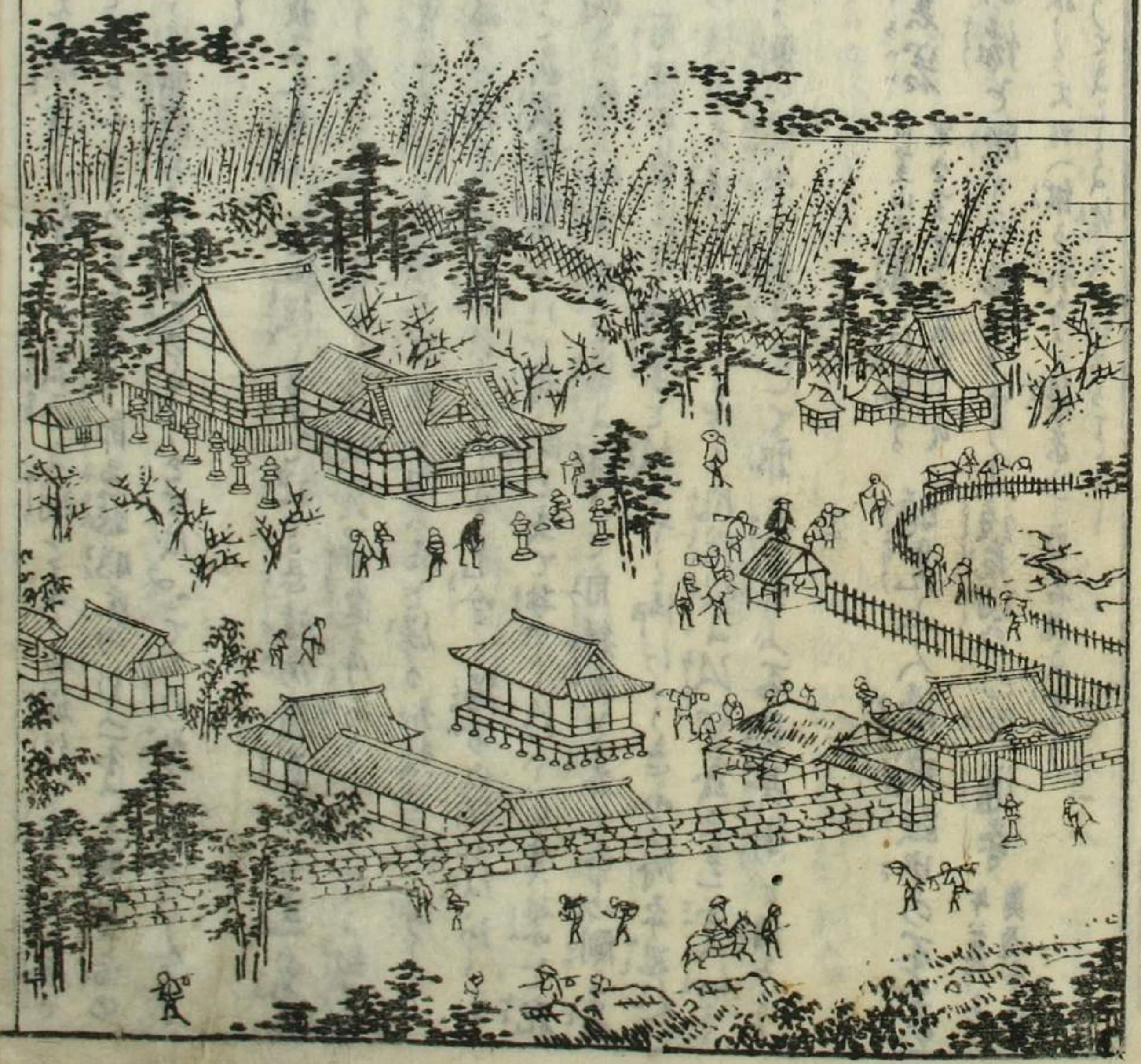
津殿の巽あり
 菅の息想の海
 松の南と枝て我
 飛くくは葉へし新
 終ふは脱とあか
 余も憶めぬの形あり
 枝乾へまよふは
 三日尺衆歎地と地
 おくく南の流と来
 西より耳の株のまきと
 毛を八尺もこそ大
 良乃方より坤の向



二十間斗乾より巽の
 方十二間余其の処に方
 へて偃蓋乃て
 又風雪のふふは
 子を思まて枝て
 をんでまふや百とん
 て美人唄の釘匠の
 おくく

津乃
 雲本
 うへへ

惜哉
 舊株
 津乃



人ぞかゝりて帝を感ずるなりて我らも祠を建てて後位と金に著せし
て人々を感ずせしむるなりて是に匹馬下郎の跡跡麻の跡に傳へて神聖者の
肝腸を吐くなりて此の雷鳴を感ずるなりて是のなりて是はいつて云のなりて是に
つて感ずるなりて是のなりて

○時平の國自其姓の長子之奉少して心悅く奉と祝て甚後廣道真とて是の
物よりて為人麻ありて是のなりて此の傳やむは此の非進序ありて此の二後
三十九とて是の傳は此のなりて此の奉後之に後を政を長と傳ふ和教とて
學文とて是の傳は此の三代實派と傳ひいつとも是令く獨歩のなりて
又附の風俗甚大者して衣服華麗なるは帝制とて是の傳は此のなりて
以者多し帝是と感ひ此の附平帝と密に傳りて自鮮衣と若て帝の側
る帝伴て大に感り百僚の長にして國禁と教るやと傳けしきあり附平
又とて是の傳は此の傳は此の傳は此の傳は此の傳は此の傳は此の傳は
正統のなりて是の傳は此の傳は此の傳は此の傳は此の傳は此の傳は
似て甚野鄙

蓮教寺

牛岩村の
牛岩山

日笠山の麓に
黒くつらなる

時光上人淨戒
時光上人淨戒
時光上人淨戒

檜山

日笠山の麓に
黒くつらなる

時光上人淨戒
時光上人淨戒

時光上人淨戒
時光上人淨戒

所名所名

日本紀推古十一年に月出六日又播磨み河の村後妻舍人姫玉奉石
み鹿以仍て赤石橋美園乃と云ふ事と云ふ此のなりや

檜山

日笠山の麓に
黒くつらなる

時光上人淨戒
時光上人淨戒

時光上人淨戒
時光上人淨戒

大嶺

日笠山の麓に
黒くつらなる

時光上人淨戒
時光上人淨戒

時光上人淨戒
時光上人淨戒

東西二里外の岡嶺嶺より電燈を乃教に百軒をり赤徳新漢
又も勝るなり

小細いくつらけ繩よりなりて是のなりて是のなりて是のなりて

的秋

日笠山の麓に
黒くつらなる

時光上人淨戒
時光上人淨戒

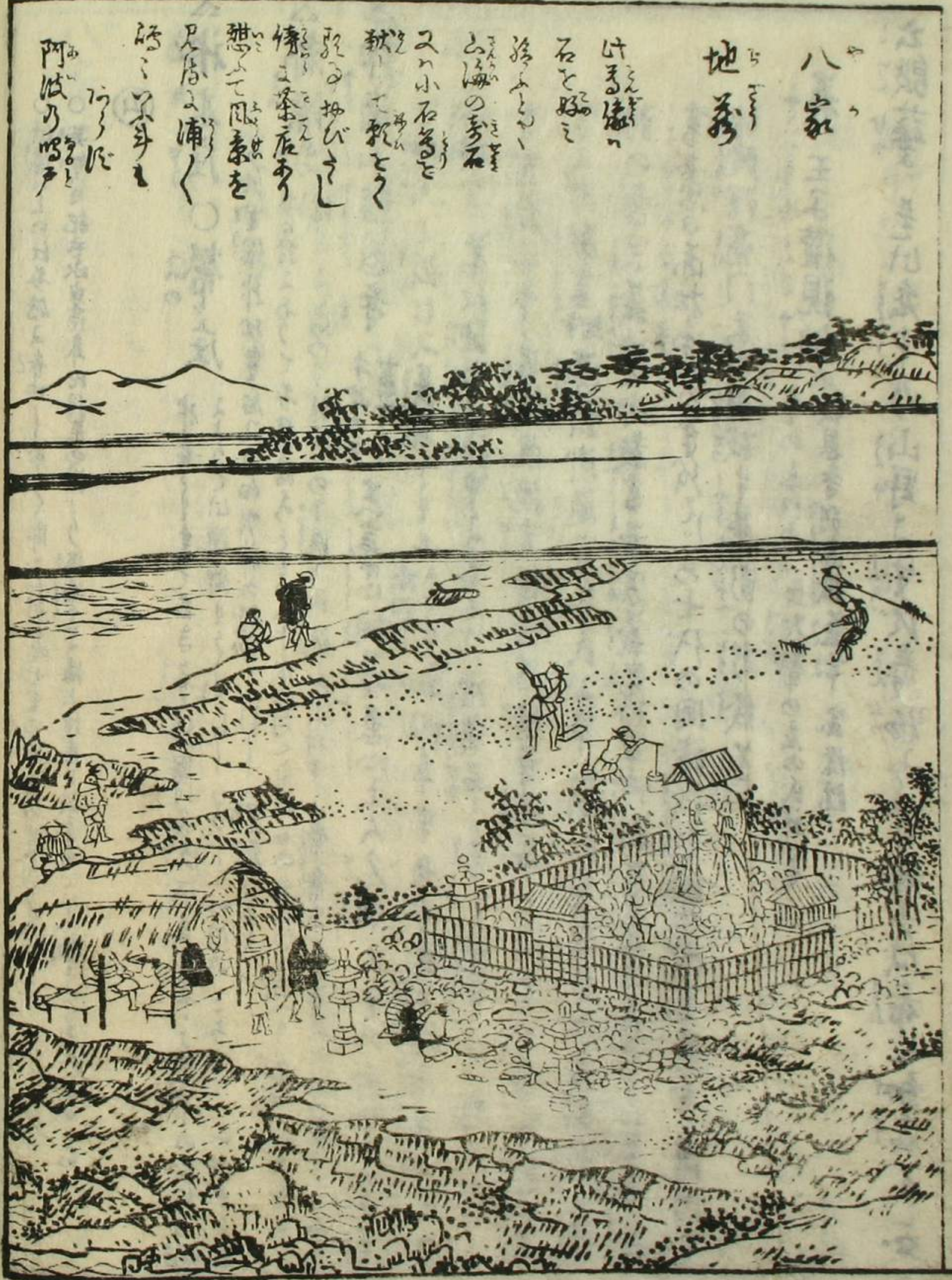
時光上人淨戒
時光上人淨戒

各軍制弓馬を感むは是の的秋と弓以後は享祿元年三月又日
妙にして各軍加造り以て

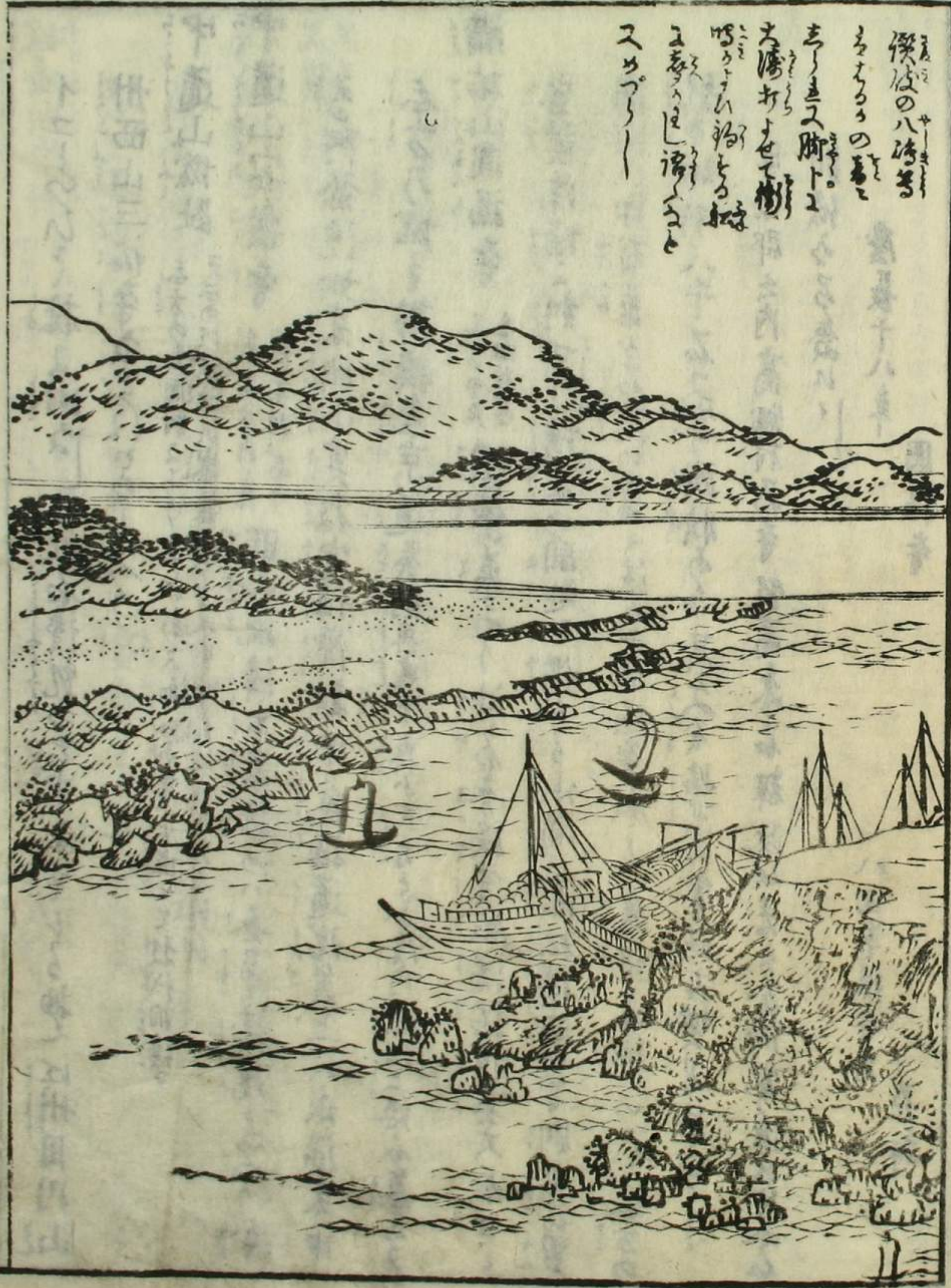
此の湊のなりて是のなりて是のなりて是のなりて是のなりて

八家
地美

けりる徳の
石と好こ
又、小石多
秋、これぞ
傍、茶店あり
懸、て同系を
足、居、又、浦、く
阿波の鳴戸



徳の八崎
又、又、脚、ト、
大、浦、お、よ、せ、て、物、
又、又、巨、浦、く、
又、又、フ、ー、



イコトのいしと據りしはしこ石護乳の古中とせしと抄之江州月川山
州西山三祐寺とていひあり

中道山城跡

志方の左邊村あり赤松朝の御時赤松居城とて抄に相續て
志方の左邊村あり赤松朝の御時赤松居城とて抄に相續て

中道山安樂寺

志方あり西山流津古字抄に五寺を寺院とていひあり
志方あり西山流津古字抄に五寺を寺院とていひあり

阿彌陀如来開山実信僧都中貞梅道瑞上人永祿年中
阿彌陀如来開山実信僧都中貞梅道瑞上人永祿年中

志方乃城主柳橋左京進秀則再建中貞公志言と云内赤松上総公墓あり
志方乃城主柳橋左京進秀則再建中貞公志言と云内赤松上総公墓あり

満祐山圓福寺

志方の左邊村あり満祐の墓あり法名系福寺殿満祐性具大居士
志方の左邊村あり満祐の墓あり法名系福寺殿満祐性具大居士

宝篋院塔と刻せり塔基の圓迦と供じり水溜り赤松播磨守則系男
宝篋院塔と刻せり塔基の圓迦と供じり水溜り赤松播磨守則系男

柳田八郎有系が石棺の蓋之法名圓福寺殿とて建保年中の人志方の
柳田八郎有系が石棺の蓋之法名圓福寺殿とて建保年中の人志方の

飲り知り八千石又寄附あり其父系始末の書法右賢足付あり
飲り知り八千石又寄附あり其父系始末の書法右賢足付あり

兵庫郡之内高畑村の寺飲高冬石輝政以来志方赤松寄進は此寺
別後ありありし

慶長十八年

圓福寺

八回を後守元

花押

八幡宮

志方の左邊方町村あり近村三田村の氏神官は甚
志方の左邊方町村あり近村三田村の氏神官は甚

天神山古松

志方の左邊村あり古松園心り男赤松輝元赤松氏之幼奉
志方の左邊村あり古松園心り男赤松輝元赤松氏之幼奉

より大が勢あり武勇人なり元弘の乱より志方の物命と云ふ
より大が勢あり武勇人なり元弘の乱より志方の物命と云ふ

軍に属して忠誠を運ぶ赤松一族多し其初め赤松も亦二の心を
軍に属して忠誠を運ぶ赤松一族多し其初め赤松も亦二の心を

變せし赤松白川の合戦より一騎出づるの武功をたし又永徳の比山名氏
變せし赤松白川の合戦より一騎出づるの武功をたし又永徳の比山名氏

志方と云ふ南朝後村上帝の聖運といふ志方の御時赤松居城とて抄に相續て
志方と云ふ南朝後村上帝の聖運といふ志方の御時赤松居城とて抄に相續て

長男氏妻二男家則一妹即多百三十七人至徳三年九月二日辰接切て是日
長男氏妻二男家則一妹即多百三十七人至徳三年九月二日辰接切て是日

志方の左邊村あり十水の外に冷たき温泉あり夏月に入りて
志方の左邊村あり十水の外に冷たき温泉あり夏月に入りて

大谷山長樂寺

志方の左邊村あり大谷山長樂寺あり地元の用基慈心上人高倉
志方の左邊村あり大谷山長樂寺あり地元の用基慈心上人高倉

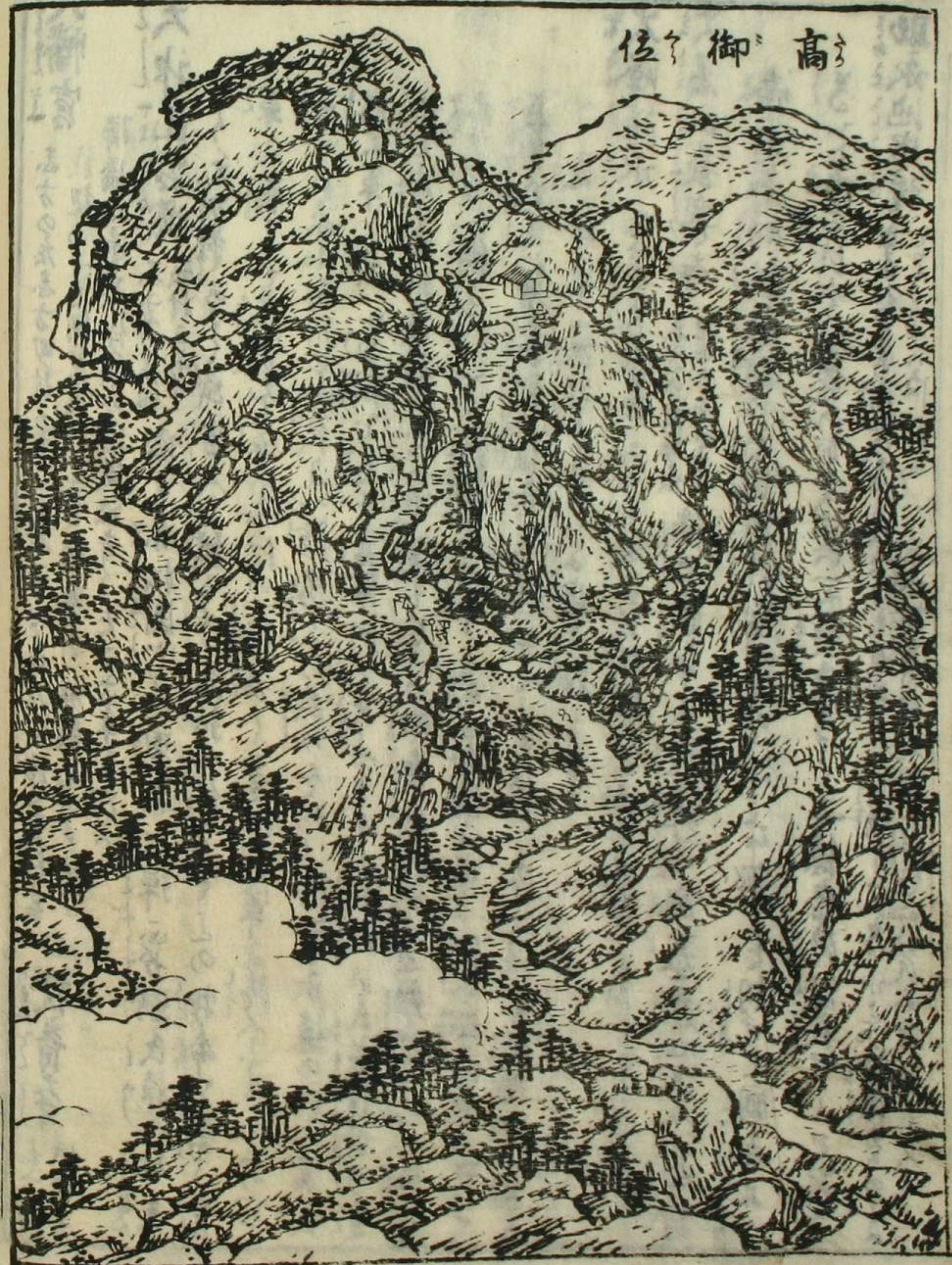
帝乃御時託胎祈のる相國法皇地系六十輪を刻せて國を治め
帝乃御時託胎祈のる相國法皇地系六十輪を刻せて國を治め

志と云ふ長樂寺の古蹟あり其地は長樂寺の古蹟あり其地は長樂寺の古蹟あり
志と云ふ長樂寺の古蹟あり其地は長樂寺の古蹟あり其地は長樂寺の古蹟あり

助永池中壇

助永村の用基溜池の古蹟あり其地は助永村の用基溜池の古蹟あり
助永村の用基溜池の古蹟あり其地は助永村の用基溜池の古蹟あり

高御位



山上石名石の二の口二
 の門抄丸文と曲折
 して大石津府の遠流
 經ふをくまのつら
 城法の名乃中うに

非常一疾乃る里改
 此の森参り奥谷の
 板垣をくまのつら
 人皆大勇小若てゆ



高御座山 志方後年の二郡 是石室殿よりなる一の座高座明神の坐之

例来九月十九日津嶽一基山上より守り守りとは行く生石より

是と林麓より迎へ高座山と宝殿より向津幸の鏡舎より生石より津

嶽より其又雙へ徳らなる中一夜之とて山と高御座と号する津座の

依之里信の傍より山上より石屑多き宝殿制地の所より送り来るし

其の之は又石屑より山を下波濤の流に其のを流津意なるより

大谷村 英賢記云永享十二月結城合戦の時赤松并に山家西海の朝

実の上洛と防ぐとけ附兵糧の所より出郡志方の庄内にて大谷

を立より依て号く

鷹巣山 高座の西のらつてきく岩壁人の通へるより津峯の松が枝より

唐が磯村 鷹の窟の定名なる 志吹洞 志吹村より石とて津に

附録

法華山一乗寺妙行院 昔の境内廣く加西印南節東三郎より跨りて又門

傳曰開基法道仙人方り法道の靈鏡山仙苑五百持明仙の其一

壽命を授けりて十方世界又於此に神力自在之身を副人の

み手大悲の洞像宝持のとして満州より供養を乞うる空持仙人

とも稱は海中従来の船み末と乞ふる岩よかの跡を生るより

宮の西南の石上より出たり 今奥傍の地 け余画の上より記す

金輪聖主自金堂一町 正和入奉十月九日 依勅造る

○車停石標 石階の

○岩英 志方乃産物飯石の山の中

守傳曰之化元年秋胆師養母より若親貞祖とのせて海上とて

法華山



宝庫什物

釈迦の像及びの佛舍利
宝新法道持来

塔中 六院明王院の弘法

十所内居本馬大威徳

明王



孝徳天皇白雉元年
至創開基法道仙人

西園二十六番の札所
本尊觀音菩薩一尺八寸

莫念佛天竺佛来

服土毘沙門不動

服檀元三三所画像毘沙

門堂門次の尊 三層塔

又紙如來 常好そ阿弥

陀 九層石塔安座の傍

ユウの 岡山乃新教之内

輪秀奥院法道仙人の廟

巖屋の内より 法華

漢涌の石像あり

又法道かの神を祀せて其者と乞ふ及みこれに御厨の授祖より
私に終るるなりと云ふに神の空に飛入る小蛇中の来儀悉く
神に付て空を飛来する雁の如し是れ其の驚き山々のありと
衆と謝せば又其儀えのどく蛇に飛入りたり其の帝は奏聞し
たりおろし御不縁の事ありて法道を百と持念を以て玉體奉
養はしくたり其後白雉元年勅を以て伽藍建立就て即ち奉
其後法道一詣を以て仙苑に帰る

我化有情乘此地 留置像神舍利羅 一涉斯境所求得

永出三途見佛院 余法道の言む我舎ありけりはして今尚存と云ふの事
我云宜神といひ我神といひ雲々の信の持外と云ふなりと云ふ我は錫神を重
と云ふありと云右物信りの奇なり今法捨還よもと云ふ

又我云物信りの奇なりはして御厨年貢の未だありぬるが事其由と云ふ
法道邪術の妖人といふはして強て實は法道なるを以てはらうと云ふ
九條の妄言を以て

播磨名所巡覽圖會卷之三終



